

四條畷市文化財調査年報

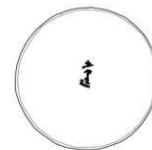
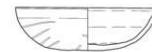
第 9 号

四條畷市文化財調査年報

第 9 号

中野遺跡 4

二〇二二・三



四條畷市教育委員会

令和 4 (2022) 年 3 月

四條畷市教育委員会

卷頭写真図版 1



1. 中野遺跡遠景（北西から・平成23年10月撮影）



2. 井戸 1 全景（北から・NN2013-2）

卷頭写真図版 2



1. 井戸 1 出土墨書き器底部・曲物蓋天板 (NN2013-2)

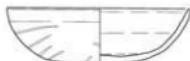


2. 出土玉類集合 (NN1989-1)

四條畷市文化財調査年報

第 9 号

中野遺跡 4



令和4（2022）年3月

四條畷市教育委員会

例　　言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第9号であり、四條畷市文化財調査報告の第61集である。本書には、平成26（2014）年2～3月に宅地造成に伴い（N N2013-2）、中野遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。関連資料として周辺での立会調査（N N1989-1、1993年度、N N2000-2）の概要を報告する。
2. 中野遺跡（N N2013-2）の発掘調査については、丹治尋好氏からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が調査を実施した。調査期間等は本文中に記載している。
3. 中野遺跡（N N2013-2）の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主任　村上　始・事務職員　實盛良彦を担当者として実施した。（肩書はいずれも当時）
4. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

地元自治会、大阪府教育庁文化財保護課、櫻井敬夫氏（故人）、瀬川芳則氏（元関西外国语大学教授）、渡辺晃宏氏（奈良大学教授）、諫早直人氏（京都府立大学准教授）、南健太郎氏（岡山大学助教）、古谷拓実氏（元奈良文化財研究所）、馬場　基氏（奈良文化財研究所）、村瀬　陸氏（奈良市教育委員会）、野島　稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（順不同）
5. 出土遺物の整理・図面作成などは、調査当時の一次整理に加え、四條畷市教育委員会生涯学習推進課上席主幹兼任主任　村上　始、主任　實盛良彦、任期付職員　古谷真人（現苅田町教育委員会）が、会計年度任用職員　田伏美智代の協力を得て行った。
6. 本書は、村上・實盛・古谷が分担して執筆・編集を行った。文責者は各文末に記載している。
7. 発掘調査の出土遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 報告図面の表示方位は、N N2013-2調査は磁北、それ以外は世界測地系の国土座標（第VI座標系）に基づく座標北である。

本 文 目 次

巻頭写真図版

例 言・凡 例

目 次

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 ······	7
第1節 遺跡の位置	
第2節 周辺の歴史的環境	
第2章 調査の経過 ······	11
第1節 既往の調査	
第2節 調査の経過	
第3章 中野遺跡（NN2013-2）調査の成果 ······	14
第1節 基本層序	
第2節 検出遺構	
第3節 出土遺物	
第4章 中野遺跡（NN1989-1、1993年度、NN2000-2）立会調査の成果 ······	35
第1節 1989-1立会調査	
第2節 1993年度立会調査	
第3節 2000-2立会調査	
第5章 調査のまとめ ······	48
第1節 調査のまとめ	
第6章 讀良郡衙と持統天皇 一中野遺跡の官衙関連遺構から— ······	49
参 考 文 献 ······	53
写 真 図 版	
報 告 書 抄 錄	

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	8
第2図 調査地区位置図	12
第3図 調査地区平面図（N N 2013-2）	15~16
第4図 調査地区断面図（N N 2013-2）	17~18
第5図 井戸1平面図・断面図（N N 2013-2）	19
第6図 井戸4平面図・断面図（N N 2013-2）	20
第7図 出土遺物（包含層・土坑・井戸・N N 2013-2）	22
第8図 出土遺物（井戸1木製品①・N N 2013-2）	24
第9図 出土遺物（井戸1木製品②・N N 2013-2）	25
第10図 出土遺物（溝3・N N 2013-2）	28
第11図 出土遺物（溝3・N N 2013-2）	32
第12図 出土遺物（溝3・N N 2013-2）	34
第13図 調査地区平面図・断面図（N N 1989-1）	37~38
第14図 出土遺物（N N 1989-1 立坑1・立坑2）	39
第15図 出土遺物（N N 1989-1 立坑4）	41
第16図 出土遺物（N N 1989-1 本体工区）	44
第17図 調査地区平面模式図・断面図・出土遺物（N N 1993立会・N N 2000-2）	46
第18図 中野遺跡（N N 1991-1）の官衙関連遺構	51

写 真 図 版 目 次

- 卷頭写真図版 1 1. 中野遺跡遠景（北西から・平成23年10月撮影）
2. 井戸1全景（北から・NN2013-2）
- 卷頭写真図版 2 1. 井戸1出土墨書き土器底部・曲物蓋天板（NN2013-2）
2. 出土玉類集合（N1989-1）
- 写真図版 1 1. 1地区近景（北西から・NN2013-2）
2. 1地区南端壁面（北西から・NN2013-2）
- 写真図版 2 1. 1・2・4地区全景（北東から・NN2013-2）
2. 2地区井戸4完掘状況（東から・NN2013-2）
- 写真図版 3 1. 3地区近景（西から・NN2013-2）
2. 3地区井戸1上層半截状況（北から・NN2013-2）
- 写真図版 4 1. 3地区井戸1井戸枠検出状況（北から・NN2013-2）
2. 3地区井戸1下層半截状況（北から・NN2013-2）
- 写真図版 5 1. 3地区井戸1方形板枠内半截状況（北から・NN2013-2）
2. 3地区井戸1方形板枠除去状況（北から・NN2013-2）
- 写真図版 6 1. 3地区井戸1井筒内曲物蓋出土状況（北から・NN2013-2）
2. 3地区井戸1井桁検出状況（北から・NN2013-2）
- 写真図版 7 1. 3地区井戸1完掘状況（北から・NN2013-2）
2. 5・6地区近景（東から・NN2013-2）
- 写真図版 8 1. 5地区溝3近景（西から・NN2013-2）
2. 5地区溝3遺物出土状況（南から・NN2013-2）
- 写真図版 9 1. 立坑4調査状況（西から・N1989-1）
2. 立坑4遺構検出状況（北西から・NN1989-1）
- 写真図版10 1. 立坑1遺構完掘状況（西から・NN1989-1）
2. 調査地全景（南西から・NN2000-2）
- 写真図版11 1. NN2013-2 出土遺物（包含層・土坑・井戸4）
2. NN2013-2 出土遺物（井戸1土器）
- 写真図版12 1. NN2013-2 出土遺物（井戸1瓦）
2. NN2013-2 出土遺物（井戸1井筒）
- 写真図版13 1. NN2013-2 出土遺物（井戸1井桁）
2. NN2013-2 出土遺物（井戸1隅柱）
- 写真図版14 1. NN2013-2 出土遺物（井戸1曲物蓋）

- 写真図版15 1. N N2013-2 出土遺物（井戸1 横板）
2. N N2013-2 出土遺物（溝3土師器・瓦器）
- 写真図版16 1. N N2013-2 出土遺物（溝3須恵器・陶磁器・玉）
2. N N2013-2 出土遺物（溝3須恵器・瓦質土器）
- 写真図版17 1. N N2013-2 出土遺物（溝3瓦・砥石）
2. N N1989-1 出土遺物（立坑1）
- 写真図版18 1. N N1989-1 出土遺物（立坑2）
2. N N1989-1 出土遺物（立坑2）
- 写真図版19 1. N N1989-1 出土遺物（立坑4 土器・瓦・埴輪）
2. N N1989-1 出土遺物（立坑4 石器・金属器）
- 写真図版20 1. N N1989-1 出土遺物（本体工区）
2. N N2000-2・93立会 出土遺物

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野地区に分けています。飯盛山系から西に向かって、讚良川・岡部川・清瀧川・権現川が流れています。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清瀧川などの中小河川によって開かれています。中野遺跡は、飯盛山系の西側の山裾部に位置する遺跡である。

第2節 周辺の歴史的環境

中野遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物がみつかっている(第1図)。

旧石器時代 紋良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・細石刃・剣器・彫器などが出土している(桜井1972)。また、忍岡古墳付近では、縦長刺片を用いたナイフ形石器が採集されている(片山1967a)。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している(野島・藤原・花田1976)。

縄文時代 縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡(野島1978b)、四條畷小学校内遺跡(野島1994c)、木間池北方遺跡(村上1979a)などでみつかっている。紋良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている(井上ほか編2003、佐伯ほか編2007、井上編2008等)。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている(野島1978b、1988)。

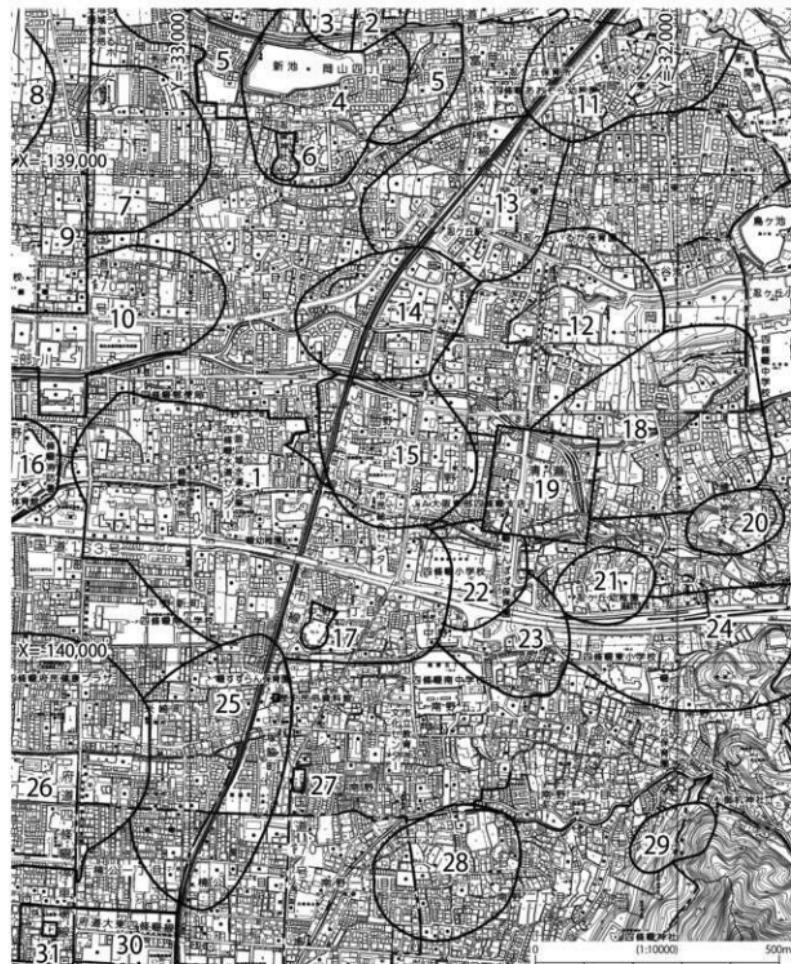
砂遺跡では中期から晩期の集落跡がみつかっている(宮野1992、四條畷市教育委員会編2008)。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の紋良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭祀具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壤墓が複数確認されている(片山1967b、桜井1972、宮野1992、野島編2000)。

弥生時代 弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突堤文土器とともに紋良郡条里遺跡の2005年の調査でみつかっている(中尾ほか編2009)。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稲作の初現を示す遺物として重要である。紋良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地上の集落が検出されている(後川・實盛・井上編2015)。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点的集落である。前期では板付II式併行期に属する大形壺の出土や(野島1984a)、集落の検出がある(村上2001f)。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している(辻本1987、野島1987a、野島1994a、阿部1999)。焼失堅穴建物や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品やト骨・銅鐸の舌や播磨地域の土器などが出土している(野島1994a、村上・實盛2011)。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、堅穴建物群や方形周溝墓などが検出され(野島1987a、阿部1999)、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している(三好ほか2007)。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸2口が出土したと伝えられ(梅原1985)、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が5基みつかっている(野島1994b)。1号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が1基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。2号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | | | |
|------------|---------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 中野遺跡 | 2. 讀良川床遺跡 | 3. 讀良寺跡 | 4. 更良岡山古墳群 | 5. 更良岡山遺跡 |
| 6. 忍岡古墳 | 7. 北口遺跡 | 8. 砂遺跡 | 9. 讀良郡条里遺跡 | 10. 奈良田遺跡 |
| 11. 坪井遺跡 | 12. 岡山南遺跡 | 13. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 14. 南山下遺跡 | 15. 奈良井遺跡 |
| 16. 鎌田遺跡 | 17. 墓ノ堂古墳 | 18. 清滝古墳群 | 19. 正法寺跡 | 20. 国中神社内遺跡 |
| 21. 大上遺跡 | 22. 四條畷小学校内遺跡 | 23. 木間池北方遺跡 | 24. 城遺跡 | 25. 南野米崎遺跡 |
| 26. 鴻屋遺跡 | 27. 伝和田賢秀墓 | 28. 南野遺跡 | 29. 近世墓地 | 30. 楠公遺跡 |
| 31. 伝楠木正行墓 | | | | |

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が（野島1994c）、部屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が（岩瀬編2012）、中野遺跡で中期の方形周溝墓が検出されている（村上・實盛2018）。

古墳時代 讀良川流域で古墳時代前期中頃に全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳が築造されている（梅原1937）。主体部は竪穴式石室（石槨）で、碧玉製の石剣・鎌形石・紡錘車・鉄劍・鉄鎌・小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讀良郡条里遺跡で微高地上の集落が検出されている（井上編2008、近藤ほか編2006、佐伯ほか編2007、後川・實盛・井上編2015）。また岡山南遺跡でも集落を検出している（村上・實盛2016）。

中～後期の古墳としては墳長約70mの前方後円墳である後期初頭の墓ノ堂古墳があり、立会調査で周堤に立てられていた馬・馬飼形人物・武人・大刀・家・蓋などの多彩な埴輪片が出土している（野島1997c、村上・實盛・古谷2021）。忍ヶ丘駅前1号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している（野島1993a、1997a）。清滝古墳群（野島1980a）や大上古墳群（村上・實盛編2017）、更良岡山古墳群（野島1981）などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。城遺跡内の大上3号墳は周溝を含めた全長が約45mある帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と埴丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した（村上2006）。清滝古墳群2号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた（野島1980a）。大上5号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盗掘されていたが、金銅装中空耳環が1点出土した（野島1999、四條畷市教育委員会編2002）。

J R 忍ヶ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・馬形埴輪・水鳥形埴輪（櫻井・佐野・野島2006、2010等）、南山下遺跡で馬形埴輪（野島1987c、d）、岡山南遺跡で家形埴輪が出土しており（野島1982）、一緒に左足用の木製下駄も出土している（野島1979a、1982、瀬川1992）。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われており、奈良田遺跡（野島1980c、野島・村上2000）、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡（村上2000等）、城遺跡・大上遺跡（村上2006）、南野米崎遺跡（野島1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編2004）などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讀良郡条里遺跡で5世紀初頭の馬骨の出土がみられ（中尾ほか編2009）、部屋北遺跡では馬具の鎧・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準構造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる（岩瀬ほか編2010、岩瀬編2012）。鎌田遺跡では溝からスリザラサラや木鎌、祭具を截せる台等の祭祀遺物が出土し（村上2001c、d、e）、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している（野島1980b、野島・村上2000、野島・村上・實盛2012）。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讀良郡条里遺跡では水田跡がみつかっている（野島1993b、中尾ほか編2009等）。讀良郡条里遺跡の2011年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた（後川・實盛・井上編2015）。北口遺跡では緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる（村上・實盛2014）。

古代 正法寺跡は、7世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である（大阪府教育委員会編1970）。一方、創建当時の建物の多くは据立柱建物であった（村上2001a）。ただし、中門は礎石建物で（野島・藤原・花田1977）、塔は石積みの遺構を伴っていた（大阪府教育委員会編1970）。また回廊の南西部分にあたると推定される位置の瓦だまりから創建時の鶴尾片が出土している（野島・村上2002）。

讀良寺跡は1969年に部分的に調査され、暗渠の可能性がある瓦敷きなどを検出し、7世紀の創建であることが分かった（櫻井1972、櫻井・佐野・野島2006、2010）。1997年の調査では正法寺跡のものと同様の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土しており（野島編2000）、文様に型起因の摩耗がみられることから、讀良寺のものが後に作られたと考えられている（野島1997b）。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみつかっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれており、木間池北方遺跡で円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した

(村上2006)。木間池北方遺跡で「□万呂」(村上2006)、南野遺跡では「大」の字を墨書きした土器が出土している(野島1995)。讃良郡条里遺跡では小型海獸葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる(後川・實盛・井上編2015)。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割施行例として注目される(中尾・山根編2009)。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡(村上2000)、木間池北方遺跡(村上2006)、茆屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書きされた土師器環や(村上2006)、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書き曲物井戸枠が出土している(村上2003、村上・實盛2019)。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されており(野島・藤原・花田1976、野島1987b)、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書き土器が出土している(野島1987a)。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している(後川・實盛・井上編2015)。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

中世以降 鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡(村上2003a)、南山下遺跡(野島・村上2001、村上2001b)、岡山南遺跡(野島・藤原・花田1976、野島1982、野島・前田1984、野島1987b、村上2004、村上・實盛2013a)、中野遺跡(野島1977、1986b、西尾1987)、忍ヶ丘駅前遺跡(野島1983、村上1997b)、四條畷小学校内遺跡(村上2000)、大上遺跡(村上2006)木間池北方遺跡(村上1997a)、南野遺跡(野島1995)、茆屋北遺跡(岩瀬ほか編2010)、讃良郡条里遺跡(後川・實盛・井上編2015)、南野米崎遺跡、楠公遺跡、茆屋遺跡等で集落跡等がみつかっている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壤墓がみつかっており(野島1996a、b)、工房跡では鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の実質の大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一帯を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡は大東市教育委員会によって調査が行われ(黒田1989)、平成23年度には城跡の詳細な縦横図を測量・作成した(村上・實盛編2013、黒田2013)。大東市教育委員会・四條畷市教育委員会2013)。その後四條畷、大東両市により城跡の総合調査に着手し、石垣、瓦、礎石建物という織豊系城郭の要素を先駆的に導入した二期となる戦国城郭であることが判明した(李編2020)。

室町時代後期の16世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大将軍社が創建され、明治44年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正脉あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている(後川・實盛・井上編2015)。

(實盛良彦)

第2章 調査の経過

第1節 既往の調査

中野遺跡は、四條畷市中野本町・中野新町・中野一～三丁目に広がる遺跡で、古墳時代・中世の集落跡である。この遺跡は1977年に大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴い発見され、中世の石組井戸などや、古墳時代中期の大溝がみつかった(野島1977、1986b)。この大溝からは朱塗りの壺や滑石製玉類、馬の下顎骨等が出土している(野島1986b、四條畷市教育委員会編2004)。またその後の二次調査では、隅丸方形の周溝状遺構を検出し、多量の漆が入った須恵器把手付碗や製塙土器等が出土している(野島1977、1978c、1986b)。

同年からは国道163号の拡幅工事に伴う調査が始まり、数次にわたって調査が行われた(野島1978a、西尾1987、1988、村上2000、2006)。1977～1978年の調査では、平安時代～室町時代の集落跡が確認され、室町時代の石組井戸から花崗岩の石臼が出土した(野島1978a)。この調査では硬玉製勾玉など古墳時代の遺物も出土している。1986年の調査でも中世の集落跡を確認したほか、古墳時代中期～後期の大溝から人物埴輪片や滑石製玉類、舟形木製品などが出土した(西尾1987)。1987～1988年の調査では古墳時代中期後半の井戸から板に乗せられた状態で馬頭骨が出土した(西尾1988)。井戸廃絶時に犠牲とされたものと考えられている(四條畷市教育委員会編2004)。1994年の調査では、古墳時代後期前半の落込から滑石製玉類が出土した(村上2000)。1996年の調査では奈良時代末～平安時代ごろの方形横板井戸を検出し、井戸内から「日置」と墨書きされた土師器環が出土した(村上2006)。

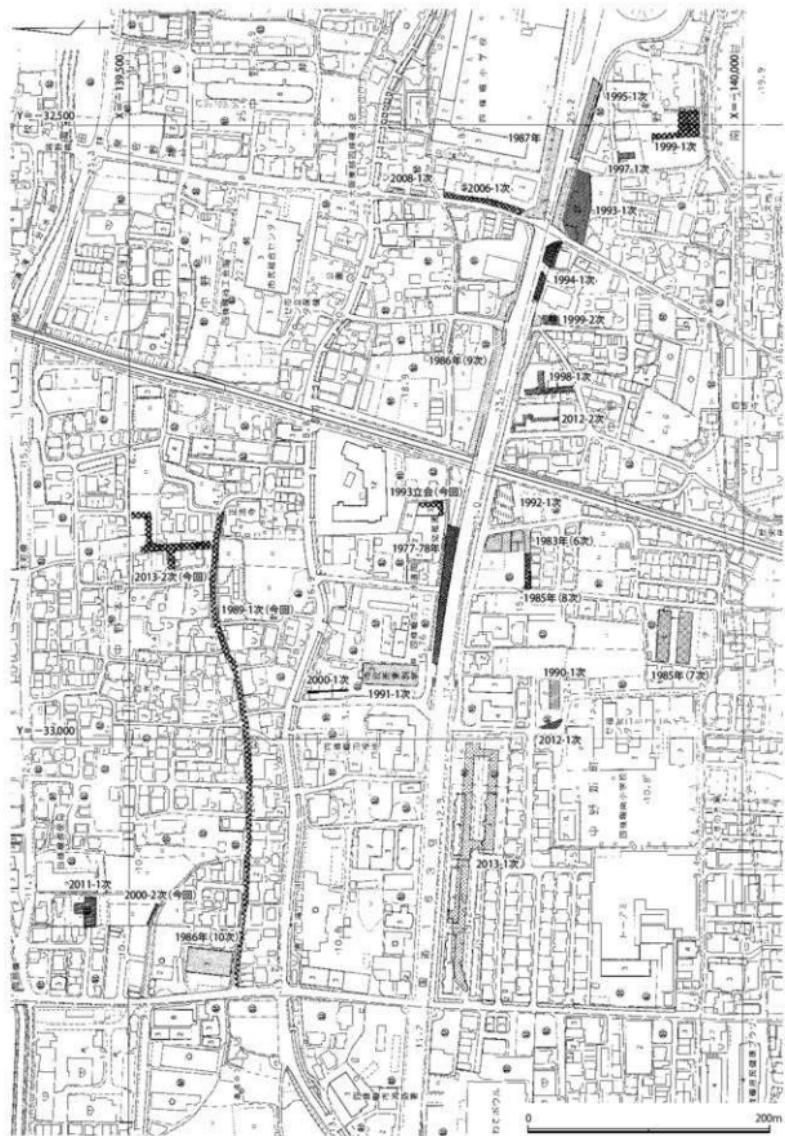
この間他の開発に伴う調査も多く行われており、1977年の旧国鉄片町線(現JR学研都市線)複線化工事に伴う調査では古墳時代後期の掘立柱群を検出している(野島1977)。1983・1985年の民間開発に伴う調査でも古墳時代の遺物が出土している(野島・前田1984、野島1986a)。1985年のマンション建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の井戸を検出し、井戸内からは石製玉類や多量の製塙土器などが出土した(野島1986b)。1986年の倉庫・事務所建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の掘立柱建物や竪穴建物等を検出し、井戸から馬形木製品が出土した(松岡1987)。1989年度の公共下水道工事に伴う調査では、弥生時代～近代の資料が出土した。特筆すべきものとしては古墳時代の大量の玉類、奈良時代の青銅製跨帶(丸軋)、皇朝十二錢の饒益神寶、江戸時代の銅鏡などがあった(本書・野島1990)。1990年度と2012年度1次の旧法務局関連の調査では古墳時代中期の集落を検出した(村上・實盛2018)。1991～1992年の市役所東別館新築工事に伴う調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭ごろの方形縦板井戸を検出し、その底部の井戸枠に使われていた曲物には「應保二年 如月廿日」の墨書きがあった(村上2003b、村上・實盛2019)。また溝からは青銅製跨帶(巡方)や長年大寶が出土した。1992年にはマンション建設工事に伴い中世及び古墳時代の集落跡を検出した(村上・實盛2018)。

1993年のガソリンスタンド建設に伴う調査では横穴式石室を検出している(村上2006・四條畷市史編さん委員会編2016)。石室は床面のみの残存であったが、玄室から義道へ延びる石組排水溝を確認した。

1997年度調査(村上・實盛・古谷2021)では古代の集落を、1998年度(村上・實盛・古谷2021)、1999年度1次(整理中)、同2次調査(村上・實盛・古谷2021)では古墳時代から古代にかけての集落跡を検出した。1999年度1次調査では竪穴建物2基を検出した。

2007年から2009年にかけて主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴って2次にわたって行った調査では古墳時代の区画溝を検出し(村上・實盛2013a)、隣接する古墳時代祭祀遺跡である奈良井遺跡とのつながりが明らかになってきた。2011年度の調査では、平安後期～鎌倉前期の集落を検出し、「延任」の人が書かれた木簡が出土した(村上・實盛2014)。2012年度2次調査では古墳時代の集落跡を検出した(村上・實盛・古谷2021)。2013年度の調査では平安時代から中世にかけての集落跡・古墳時代の集落跡・弥生時代の方形周溝墓を検出した(村上・實盛2018)。特に弥生時代の遺構は中野遺跡では初の確認であった。同年度の2次調査では古代～中世の集落を確認した(本書)。二重構造の重厚なつくりの井戸では年輪年代測定により708年+ α の年代が明らかになった。

(實盛)



第2図 調査地区位置図（座標は世界測地系）

第2節 調査の経過

平成25年度第2次の発掘調査（N N 2013-2）については、四條畷市中野本町359他において宅地造成工事が計画され、平成26（2014）年1月9日に丹治尋好氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。同年1月29日付け教委文第1-5271号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。また、計画用地の一部は周知遺跡の範囲外で、同年1月27日付で試掘調査依頼書および承諾書の提出があった。

平成26年1月27日に、計画用地内のうち中野遺跡範囲内に1か所、範囲外に1か所のトレンチを設定し試掘確認調査を実施した結果、中世を中心とした遺構面を確認した。遺跡範囲外については平成26年1月28日付で丹治尋好から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第96条第1項の規定により「遺跡発見の届出について」が提出され、同年2月10日付教委文第11-20号で通知があり、遺跡の範囲を拡大するとともに、発掘調査が必要との指導があった。これらの結果をもって協議を行い、遺跡が工事によって破壊される道路予定地全域の発掘調査を実施することとなった。同年1月28日付で発掘調査承諾書の提出があり、同年2月4日付般教社第1413号で、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査面積は約658m²で、調査期間は平成26年2月6日から3月15日までであった。調査は試掘確認調査の結果から、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力で掘削を行った。

調査で出土した遺物については、平成26年3月20日付般教社第1580号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年3月27日に第5729号で受理された。大阪府教育委員会には同年3月20日付般教社第1581号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年4月28日付教委文第3-10号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計30箱であった。

（實盛）

第3章 中野遺跡（N N2013-2）調査の成果

第1節 基本層序

発掘調査地区の調査前現況は、水田地および宅地であった。宅地部分のうち南半は、宅地造成のために0.6~0.8mほど盛土されていた。その下層はおよそ0.2mの耕土であった。宅地の造成以前は耕作地であったと思われる。なお、当該宅地は江戸期から続いたと称され、明治期には甲可村助役を輩出した旧家の宅地跡であり、宅地の造成は江戸期にさかのばるとみられる。

耕土の下層に0.3mほど中世の遺物包含層が堆積し、その下面が古代~中世の集落面である第1遺構面であった。その下層は灰黄色の細砂層やオリーブ黒色系の花崗岩粒を含む土層が堆積しており、遺物を包含せず地山であった（第4図）。（實盛）

第2節 検出遺構

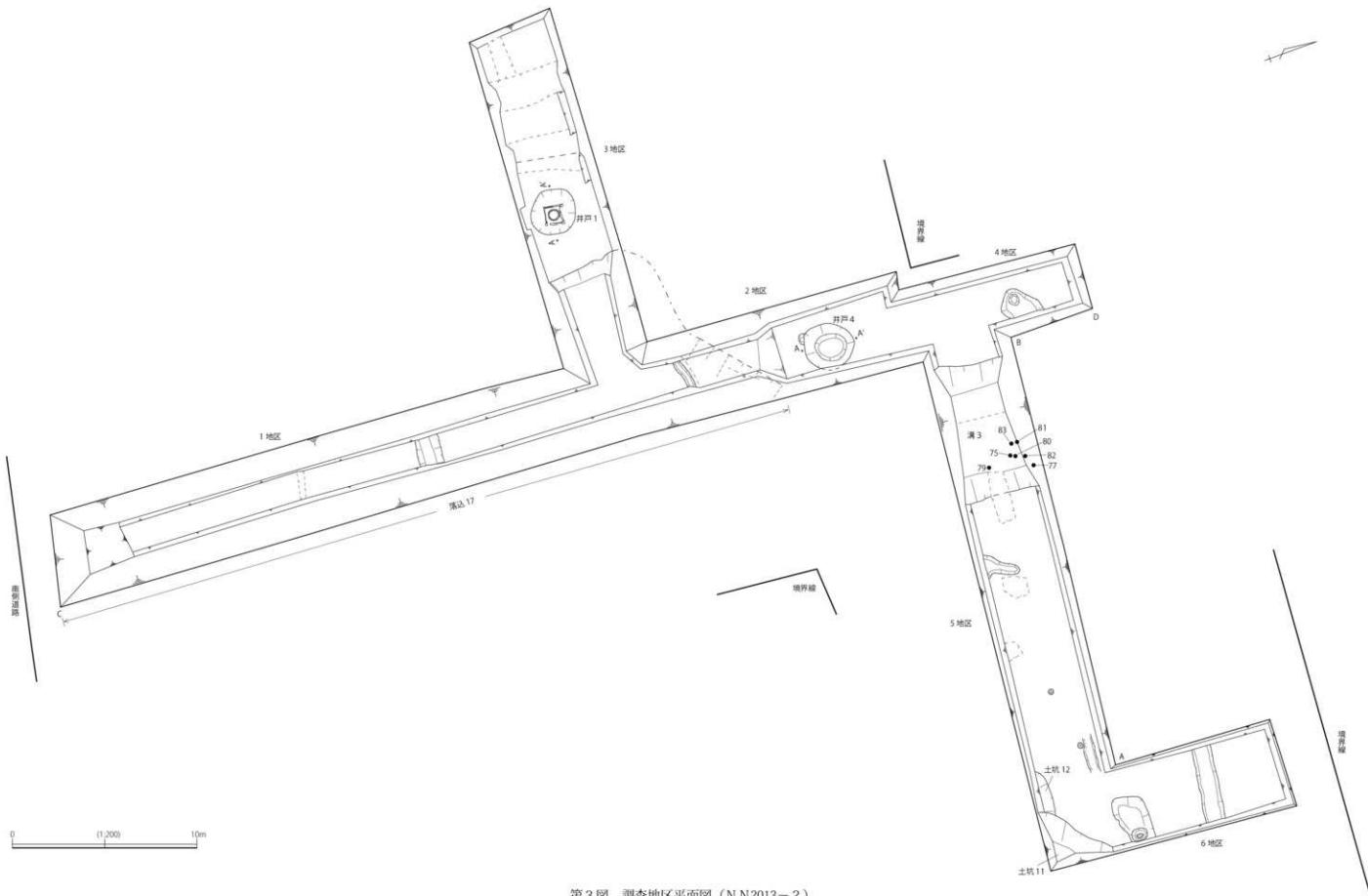
この調査で確認した遺構はおもに奈良~平安時代、中世に属するもので、Pit、土坑、溝、井戸があつた（第3図）。調査地区を便宜上6つの地区に分け、遺構、遺物の検出を行った。遺構面の標高は、調査地区北東端でT.P.+15.258m、北西端でT.P.+15.059m、西端でT.P.+14.412mであった。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。以下、遺物を掲載した主な遺構を中心に詳述する。

土坑11 調査地区北東の6地区南端で検出した。土坑としたが、溝状遺構の北肩のみを検出したとみられ、その方向からは落込17と一連のものである可能性がある。検出できた規模は長さ4.5m、幅2.8m、深さは約0.63mである。上端の標高はT.P.+15.278m、底部はT.P.+14.653mであった（第3図）。土師器皿、高环（第7図-3・4）、瓦器碗（第7図-5）、須恵器練鉢（第7図-6）などが出土した。鎌倉時代に埋没した遺構と考える。

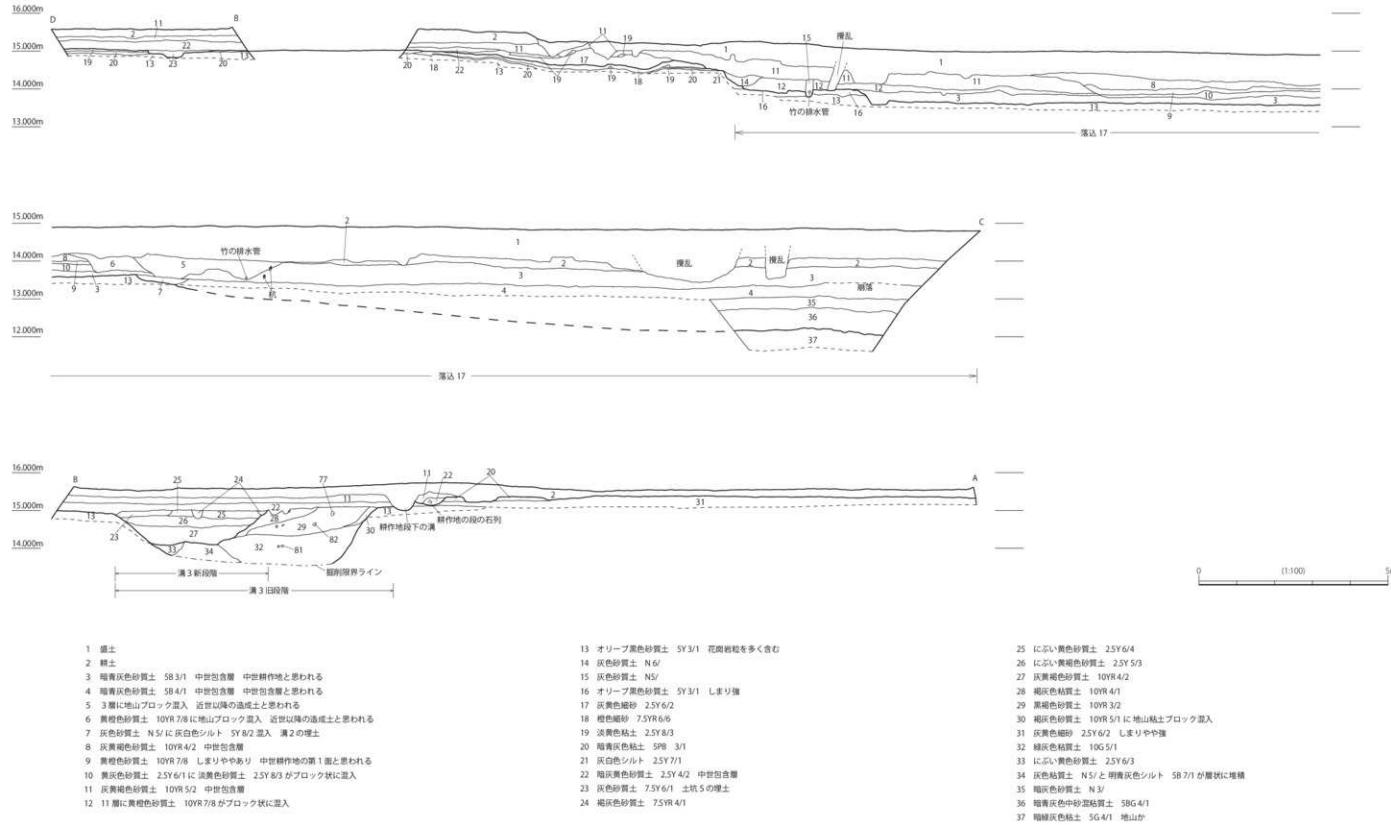
土坑12 調査地区北東の6地区南端で検出した。東西約2.6m、深さ約0.2mで、東側は土坑11に切られ、南側は調査地区外である。上端の標高はT.P.+15.224m、底部はT.P.+15.033mであった（第3図）。土師器皿（第7図-7）、壁土（第7図-8）などが出土した。鎌倉時代の遺構と考える。

落込17 調査地区中央~南側で1地区から2地区にかけて検出した。調査時は土地の起伏と認識しており、整理時に遺構番号を付した。北側の肩は遺構面掘下げを南側から順に行つた影響で当初認識できず断面観察で確認した。断面観察から二段階で南に向かって落ち込んでいるとみられる。南端が最も深くなるが、掘削深度が深く安全上の問題で全面調査を断念した。検出できた規模は東西約10m、南北約38.8mである。断面図37層は地山の可能性があり、そうであれば深さは約2.5mである。標高は北端部分の上端がT.P.+14.597m、底部がT.P.+13.772m、西端部分の上端がT.P.+14.360m、底部がT.P.+13.612mで、南端部分の底部はT.P.+12.060mであった（第3図）。この落込は北側の肩のみを検出したが、その方向からは土坑11と一連のものである可能性がある。また、標高や検出状況からみると、1989-1次調査立坑No.4で検出した大溝とも一連のものである可能性があり、その場合幅40mほどとみられる。各調査状況から、この大溝はほぼ北東から南西へと流れているとみられ、古墳時代に機能したもので、中世段階に完全に埋没して耕作地として利用されるようになったとみられる。遺物包含層出土で取り上げた土師器皿（第7図-1）は本遺構に属するとみられる。

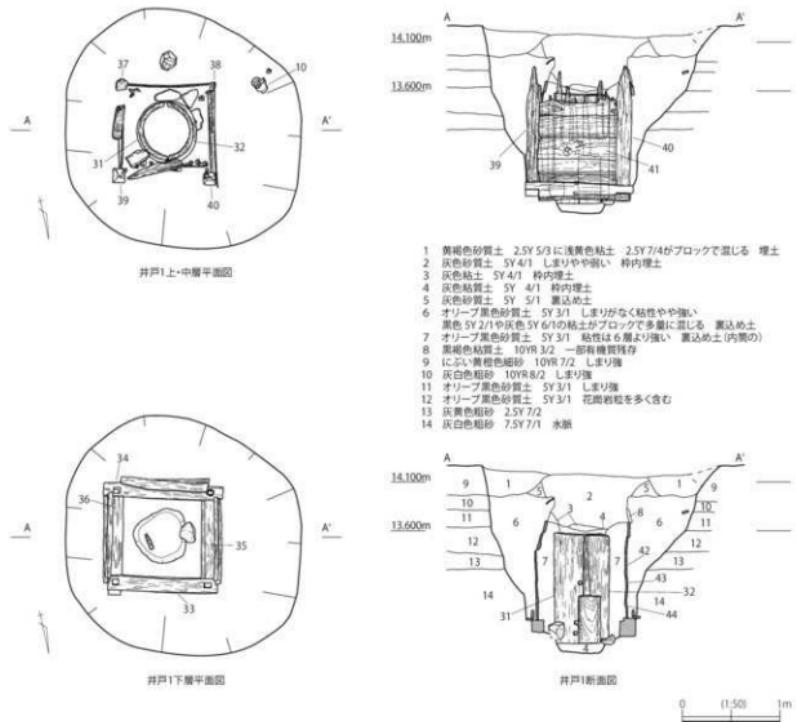
溝3 調査地区北側の5地区西寄りで検出した。北から南へと向いた溝で、両端は調査地区外。検出規模は長さ4.2m、幅7.6m、深さ1.5m以上である。安全上の問題で遺構底まで調査することができなかった。堆積状況から新旧2段階に分けることができ、新段階には幅4.1m、深さ0.8mであった。検出標高は北端部分の東側上端がT.P.+15.023m、西側上端がT.P.+14.943m、底部がT.P.+14.203mで、南端部分の東側上端はT.P.+14.945m、西側上端はT.P.+14.948m、底部はT.P.+14.143mであった（第3図）。土師器（第10図-46~63）・須恵器（第10図-64、第11図-103~108）・輸入磁器（第10図-65~70）・瓦器（第10図-71~89）・国産陶器（第10図-90~94）・瓦質土器（第10図-95~99）、



第3図 調査地区平面図 (N N2013-2)



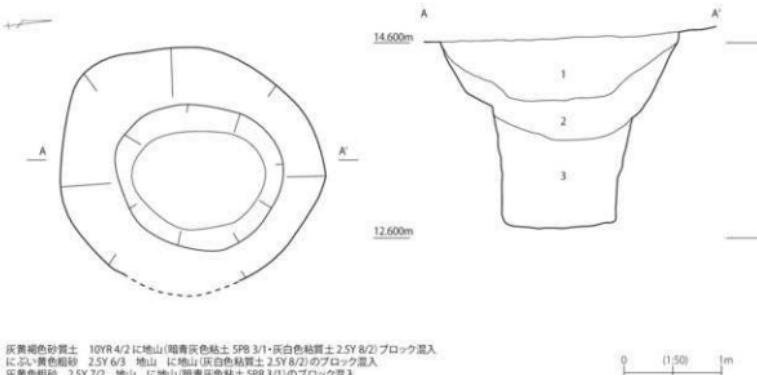
第4図 調査地区断面図 (N N 2013-2)



第5図 井戸1平面図・断面図 (N N 2013-2)

第11図-100～102)・瓦(第12図-109～115)・石製品(第12図-116～120)などが出土した。出土遺物を遺構の旧段階と新段階で分けて取り上げることができなかったが、遺物の時期に11世紀末～13世紀中ごろと、14世紀後半～16世紀前半の二つのまとまりがあり、それぞれ旧段階と新段階に対応する可能性が高いと考える。

井戸1 調査地区中央西寄りで検出した。掘方は東西南北とも約2.4mの大きさの不整円形で、深さ約1.9mである。井戸枠の形態は、底部に土居柱を設置して四隅に隅柱を立て、隅柱に施した加工部に横板を組み入れ構築した横板組隅柱型(鐘方2003)の方形枠を外枠とし、さらにその内部に、2分割した丸太を削り抜き円形に組み合わせた円形丸太削り抜き型B類(丸太分割削り抜き)(鐘方2003)の円形枠を内枠として設置している。外枠の横板材は5段分を確認し、断面観察からさらに2段ほど板材が積まれていたとみられる。内枠の材の合わせ目は、南側は幅11cm、厚さ1cmの薄板で隙間をふさぎ、その基部に27×12cmの蝶を設置し固定していた。北側は幅7cm、厚さ2cmの板材を縦間にあて、その外側に47×18×4cmの板材と、さらにその外側に49×23×5cmの板材を縦向きに設置し固定していた。遺構上端の標高はT.P.+14.276m、底部はT.P.+12.337mであった(第3・5図)。土師器皿・羽釜・甕・碗(第7図-9～12)、黒色土器碗(第7図-13)、須恵器平瓶・壺・甕(第7図-14～16)、焼塩土器(第7図-17～20)、瓦(第7図-25～30)、桃核(写真図版11-2-198)、



第6図 井戸4平面図・断面図 (N N 2013-2)

曲物蓋(写真図版14-1-197)などが出土した。井筒内最下層出土の土師器碗(第7図-12)に「常□」墨書があった。井戸枠は内枠材と、外枠の土居枠材、隅柱材全て、横板材のうち4点を図化した(第8、9図)。外枠土居枠材のうち1点(第8図-35)について光谷拓実氏に依頼し年輪年代測定を行った結果、辺材型で708年+aの測定値が出た。外枠の裏込め土から7世紀後葉の須恵器片が(第7図-15)、内枠の裏込め土から8世紀末~9世紀初頭の黒色土器片(第7図-13)が出土した。これらの出土遺物と年輪年代測定結果から、外枠は飛鳥時代末~奈良時代初頭ごろに構築され、何らかの理由で内枠が平安時代初頭に追加され、その後瓦が示す中世段階に廃絶したと考える。

井戸4 調査地区中央東寄りで検出した。直径約2.7mのいびつな円形で、深さ約2mである。井戸枠の残存はなく、一時に埋められたような堆積状況を呈するため、素掘り井戸か、もしくは井戸枠をすべて取上げ再利用した可能性がある。上端の標高はT.P.+14.719m、底部はT.P.+12.704mであった(第3・6図)。瓦器碗(第7図-21)、土師器皿(第7図-22)、製塙土器(第7図-23)、須恵器練鉢(第7図-24)などが出土した。鎌倉時代の遺構と考える。(實盛)

第3節 出土遺物

1. 包含層出土遺物

1 土師器皿 口径:10.0cm。器高:1.9cm。厚さ:0.3~0.5cm。色調:外・内・断面は灰白色(2.5Y 8/2)。胎土:密。1mm以下の砂粒を含む。焼成:不良。残存度:3/4。落込17が最終的に埋没する段階の遺物とみられる。Jタイプの13世紀代のものと思われる。(第7図-1、写真図版11-1-1)

2 石錘 縦7.3cm。横4.6cm。厚さ1.1cm。一部欠損し、上部のみ紐を結わえる凹部の加工が認められる。下部は欠損により加工が確認できない。(第7図-2、写真図版11-1-2)

2. 遺構出土遺物

土坑11

3 土師皿 口径:7.6cm(復元)。器高:1.2cm(残存)。厚さ:0.3cm。色調:外・内・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)。胎土:やや密。1mm以下の雲母・黒色砂粒を含む。焼成:良好。残存度:1/8。外内面はナデ調整を施している。Jタイプの13世紀代のものと思われる。(第7図-3、写真図版11-1-3)

4 土師器高环 口径:20.4cm(復元)。器高:2.2cm(残存)。厚さ:0.3~0.5cm。色調:外面は淡

橙色（5YR8/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR8/4）、断面は灰白色（7.5YR8/2）。胎土：やや粗。1mm以下
の雲母・赤・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外内面はナデ調整を施している。奈良時代のもので混入品。（第7図-4、写真図版11-1-4）

5瓦器碗 口径：12.6cm（復元）。器高：3.7cm（残存）。厚さ：0.2~0.5cm。色調：外・内面は暗
青灰色（5PB4/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。
残存度：1/5。口縁外内面はナデ調整、体部外表面はユビオサエ調整を施している。大和型III-B段階
で13世紀前半のものと思われる。（第7図-5、写真図版11-1-5）

6須恵器練鉢 口径：28.0cm（復元）。器高：5.4cm（残存）。厚さ：0.7~0.8cm。色調：外・内
面は灰色（N5/）、断面は灰色（N6/）。胎土：やや粗。5mm以下の黒・白色砂粒を含む。焼成：良好。
残存度：1/10。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末~13世紀初頭。（第7図-6、写真図版11-1
-6）

土坑12

7土師皿 口径：9.6cm（復元）。器高：1.2cm（残存）。厚さ：0.6cm。色調：外・内面は浅黄橙色（10YR8/3）、
断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁外内面は
ナデ調整、外表面はナデ・ユビオサエ調整を施している。Jタイプの13世紀代のものと思われる。（第7
図-7、写真図版11-1-7）

8壁土 横幅：3.2cm（残存）。縱幅：5.1cm（残存）。厚さ：2.5cm。色調：内・外・断面ともにぶ
い黄橙色（10YR7/4）。3mm以下の砂粒を含む。表面は平らで、裏面には木舞痕、スサ痕がある。（第
7図-8、写真図版11-1-8）

井戸1

土師器

9皿 口径：11.0cm（復元）。器高：1.5cm。厚さ：0.3~0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色（2.5YR
8/2）。胎土：やや密。1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：やや不良。残存度：1/6。（第7図-9、
写真図版11-2-9）

10甕 口径：21.8cm（復元）。器高：13.6cm。厚さ：0.3~0.8cm。色調：外・内・断面は灰白色（7.5YR
8/2）。胎土：密。2mm以下の雲母・白・黒・赤・灰色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。平城
III-Vごろ（8世紀後半）と思われる。方形板枠裏込め土上面の再掘削層から出土。内枠井筒の設置
時に遺存したとみられる。（第7図-10、写真図版11-2-10）

11羽釜 口径：26.6cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.8~1.3cm。色調：外表面にぶい橙
色（5YR6/4）、内面は橙色（7.5YR6/6）。外表面は灰褐色（7.5YR 5/2）。胎土：粗。2mm以下の砂粒を含む。
焼成：やや不良。残存度：小片。9世紀初頭ごろのものと思われる。（第7図-11、写真図版11-2
-11）

12碗 口径：11.3cm。器高：3.4cm。厚さ：0.2~0.4cm。色調：外表面は橙色（2.5YR6/6）、内面はに
ぶい橙色（5YR7/3）。胎土：密。1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：9/10。底部に「常
□」墨書がある。井筒内最下層から出土。8世紀末~9世紀初頭（京II期中頃）か。（第7図-12、
写真図版11-2-12）

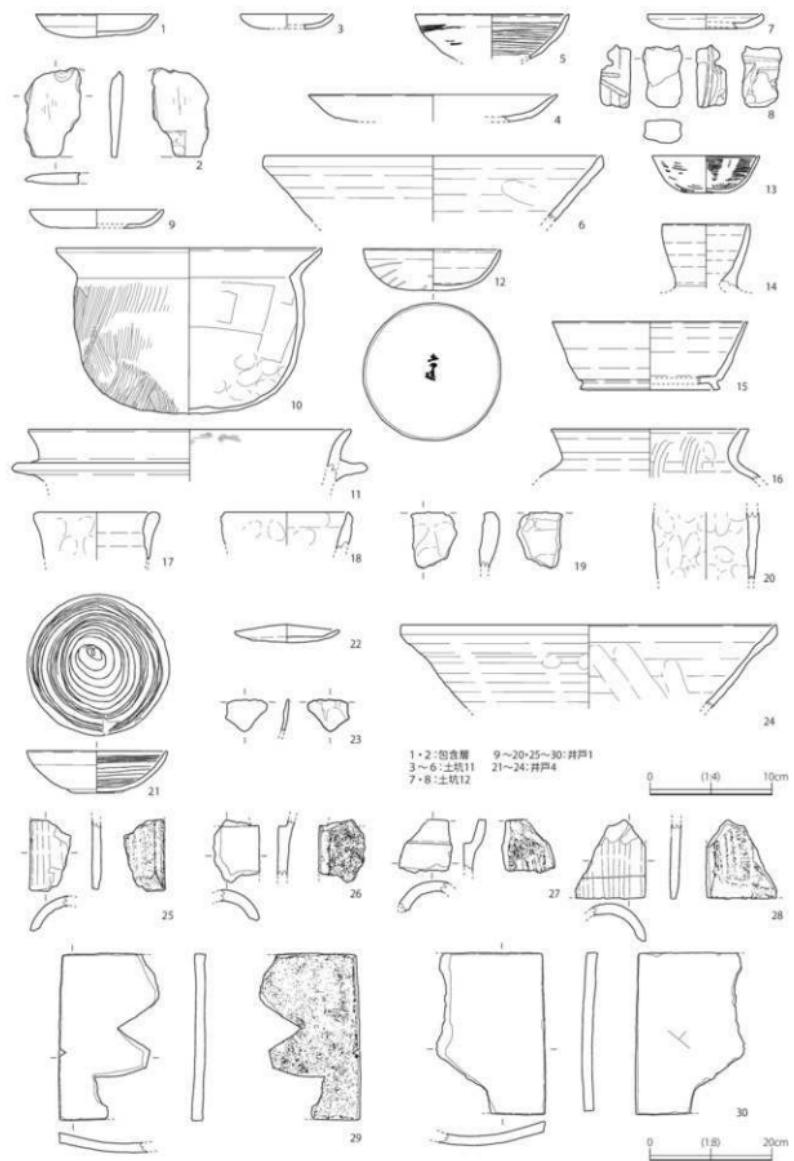
黒色土器

13A類碗 口径：8.8cm。器高：3.0cm。厚さ：0.3cm。色調：外・断面は明褐灰色（5YR7/2）、内面
は黒色（N2/）。胎土：やや粗。1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：2/5。方形板枠内
の井筒裏込め土から出土。8世紀末~9世紀初頭（京II期中頃）か。内枠井筒の設置時期を示す可能
性がある。（第7図-13、写真図版11-2-13）

須恵器

14平瓶 口径：7.2cm（復元）。器高：5.3cm。厚さ：0.3~1.6cm。色調：外・内面は青灰色（5PB6/1）、
断面は明緑灰色（5P7/1）。胎土：密。2mm以下の黒・白色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：
小片。（第7図-14、写真図版11-2-1）

15环身 口径：16.0cm（復元）。底径：11.4cm（復元）。器高：5.6cm。厚さ：0.2~0.5cm。色調：
外表面は青灰色（5PB5/1）、内面は青灰色（5PB6/1）。断面は灰白色（7.5YR 8/1）。胎土：密。1mm以下



第7図 出土遺物（包含層・土坑・井戸・NN2013-2）

の白色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：1/5。TK48型式（III型式第3段階）で、飛鳥編年飛鳥IV（7世紀後葉）とみる。方形板枠の裏込め土出土で、井戸全体の構築時期を示す可能性がある。（第7図-15、写真図版11-2-15）

16甕 径口：16.2cm（復元）。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.5～0.8cm。色調：外面は暗緑灰色（5G4/1）、内面は明青灰色（5PB7/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mmの雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。8世紀中ごろのものと思われる。（第7図-16、写真図版11-2-16）
焼塙土器

17焼塙土器 口径：10.4cm（復元）。器高：3.9cm（残存）。厚さ：0.2～1.1cm。色調：外面は灰白色（2.5YR8/1）、内面は青灰色（10YR8/2）、断面は灰白色（N7/）。胎土：粗。1mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第7図-17、写真図版11-2-17）

18焼塙土器 口径：10.8cm（復元）。器高：3.0cm（残存）。厚さ：0.5～0.9cm。色調：外面は灰白色（10YR8/1）、内面は灰白色（10YR8/2）、断面は灰白色（N7/）。胎土：粗。2mm以下の黒・赤色砂粒を少量含む。焼成：不良。残存度：小片。（第7図-18、写真図版11-2-18）

19焼塙土器 幅：3.7cm（残存）。器高：4.6cm。厚さ：0.8～1.5cm。色調：外面は灰白色（5YR8/2）、内面は灰白色（10YR8/2）、断面はぶい橙色（10YR7/4）。胎土：粗。2mm以下の白・灰・黒色砂粒を多量に含む。焼成：不良。残存度：小片。（第7図-19、写真図版11-2-19）

20焼塙土器 最大径：8.8cm（残存）。器高：5.5cm（残存）。厚さ：0.5～0.9cm。色調：外面は灰白色（5Y8/1）、内面は灰白色（2.5Y8/2）、断面は灰色（N6/）。胎土：粗。4mm以下の赤・白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第7図-20、写真図版11-2-20）
瓦

25丸瓦 横幅：6.6cm（残存）。縦幅：11.8cm（残存）。色調：色調：外面は暗青黒色（5PB3/1）、内面は灰色（7.5YR6/1）、断面は灰色（N5/）。胎土：やや粗。4mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。裏面は布目が残る。（第7図-25、写真図版12-1-25）

26丸瓦 横幅：7.6cm（残存）。縦幅：10.4cm（残存）。色調：外・内面は青黒色（5PB1.7/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：粗。5mm以下の雲母・灰・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。裏面は布目が残る。玉縁。（第7図-26、写真図版12-1-26）

27丸瓦 横幅：8.7cm（残存）。縦幅：8.8cm（残存）。色調：外・内面は暗青黒色（5PB4/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：やや粗。2mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。裏面は布目が残る。玉縁。（第7図-27、写真図版12-1-27）

28丸瓦 横幅：11.5cm（残存）。縦幅：13.0cm（残存）。色調：外面は青黒色（5PB1.7/1）、内面は暗青黒色（5PB4/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：やや粗。1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。表面にナデ・ヘラケズリがあり、裏面は布目が残る。（第7図-28、写真図版12-1-28）

29平瓦 横幅：16.5cm（残存）。縦幅：24.2cm。色調：外・内面は青黒色（5PB1.7/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：粗。1mm以下の雲母・白色砂粒を含む。焼成：良好。表面にナデがあり、裏面は布目が残る。（第7図-29、写真図版12-1-29）

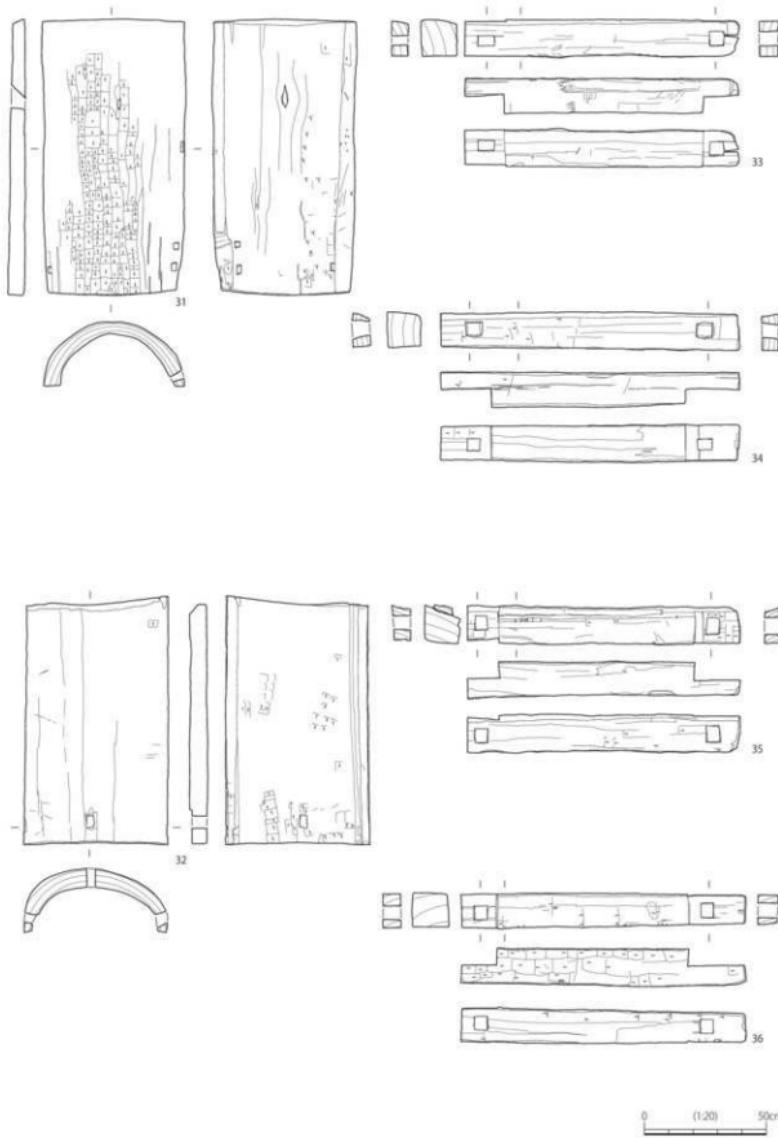
30平瓦 横幅：17.8cm（残存）。縦幅：26.6cm。色調：外・内面は青黒色（5PB1.7/1）、断面は灰白色（N8/）。胎土：粗。4mm以下の雲母・白・灰色砂粒を含む。焼成：良好。表裏面は板ナデが施される。これら丸・平瓦はいずれも中世のものと思われる。（第7図-30、写真図版12-1-30）

木製品

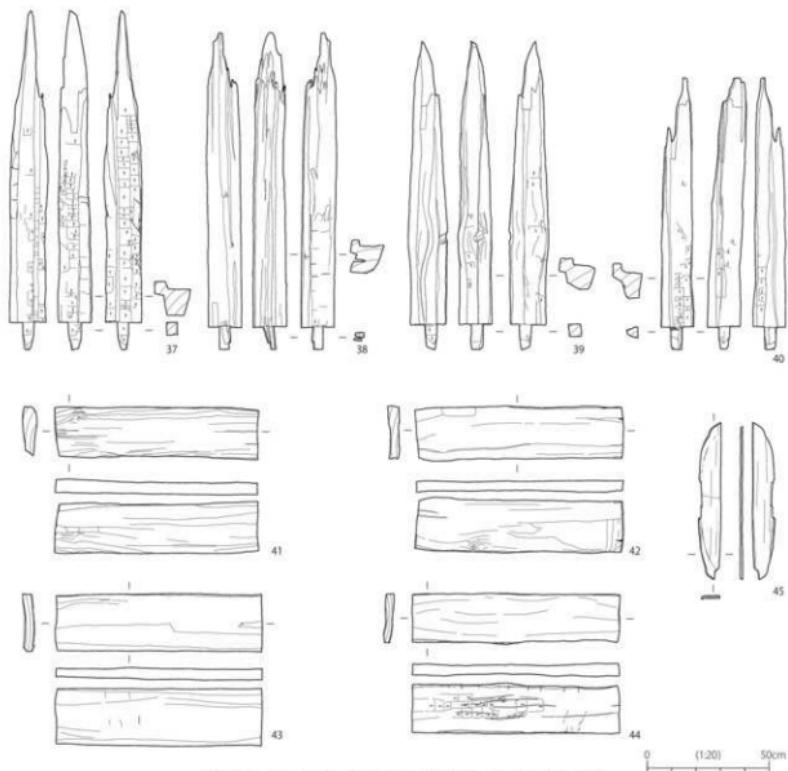
31井筒（東側） 長さ：113.2cm。幅59.2cm。厚さ4.0～7.4cm。表裏面ともに手斧による加工痕がみられる。裏面端部は逆方向の加工痕がみられ、井筒再利用に伴うものと思われる。井筒西側と同一のものと思われ、準構造船の船体部分の再利用と思われる。（第8図-31、写真図版12-2-31）

32井筒（西側） 長さ：102.2cm。幅59.2cm。厚さ3.0～7.8cm。表裏面ともに手斧による加工痕がみられる。裏面端部は逆方向の加工痕がみられ、井筒再利用に伴うものと思われる。井筒東側と同一のものと思われ、準構造船の船体部分の再利用と思われる。（第8図-32、写真図版12-2-32）

33井桁（北） 長さ：112.8cm。幅15.6cm。厚さ6.2～14.2cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。（第8図-33、写真図版13-1-33）



第8図 出土遺物（井戸1木製品①・N N2013-2）



第9図 出土遺物（井戸1木製品②・NN 2013-2）

34井桁（南） 長さ：123.0cm。幅15.6cm。厚さ6.6～14.4cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。（第8図-34、写真図版13-1-34）

35井桁（西） 長さ：112.0cm。幅15.8cm。厚さ6.0～14.6cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。光谷拓実氏に年輪年代鑑定を依頼した結果、辺材型でAD708年+ α であった。（第8図-35、写真図版13-1-35）

36井桁（東） 長さ：117.2cm。幅14.2cm。厚さ7.2～15.4cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられる。（第8図-36、写真図版13-1-36）

37隅柱（南東） 長さ：139.2cm、11.4cm（部分）。幅15.6cm（最大）、5.2cm（ほぞ部分最大）。表裏面ともに手斧による加工痕がみられる。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。（第9図-37、写真図版13-2-37）

38隅柱（南西） 長さ：140.0cm、10.8cm（部分）。幅13.6cm（最大）、4.4cm（ほぞ部分最大）。表裏面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。一部、手斧以外の加工痕もみられる。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。別材によるほぞの補強がみられる。（第9図-38、写真図版13-2-38）

39隅柱（北東） 長さ：126.4cm、10.4cm（部分）。幅16.0cm（最大）、5.0cm（ほぞ部分最大）。表裏

面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。(第9図-39、写真図版13-2-39)

40隅柱(北西) 長さ: 101.4cm、9.6cm(部分)。幅14.4cm(最大)、4.6cm(ほぞ部分最大)。表裏面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。下部に井桁へ差し込むためのほぞが残存する。(第9図-40、写真図版13-2-40)

41横板 長さ: 84.0cm。幅21.4cm。厚さ3.4~5.8cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠北辺下から3基目(取上げ記号北②)。(第9図-41、写真図版15-1-41)

42横板 長さ: 85.8cm。幅22.1cm。厚さ3.4~4.8cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠西辺下から3基目(取上げ記号西2段目)。(第9図-42、写真図版15-1-42)

43横板 長さ: 85.2cm。幅23.8cm。厚さ3.2~4.8cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠西辺下から2基目(取上げ記号西3段目)。(第9図-43、写真図版15-1-43)

44横板 長さ: 113.2cm。幅59.2cm。厚さ4.0~7.4cm。表裏側面ともに手斧による加工痕がみられるが不明瞭である。方形枠西辺下から1基目(取上げ記号西4段目)。(第9図-44、写真図版15-1-44)

45板材 長さ: 64.4cm。幅9.1cm(最大)。厚さ0.7~1.1cm。表裏面ともに残る加工痕は不明瞭であるが、表面に弧を描くように線刻があり、中央にもある。転用材と思われる。井桁材下部で出土した。井桁材設置高を調整するために用いたとみられる。(第9図-45、写真図版15-1-45)

197曲物蓋 口径: 22.0cm。天板径: 22.8cm。高さ5.8cm。天板に植物の陰刻文様が彫られている。井筒内最下層から出土。(写真図版14-1-197)

井戸4

21瓦器碗 口径: 11.5cm。器高: 3.5cm(残存)。厚さ: 0.45cm。色調: 外・内面は青灰色(5PB 6/1)、断面は灰白色(N8/7)。胎土: やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成: 不良。残存度: 1/1。口縁外内面はナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施している。第1層からの出土。大和型III-D段階で13世紀後半のものと思われる。(第7図-21、写真図版11-1-21)

22土師皿 口径: 7.1~8.6cm。器高: 1.2cm。厚さ: 0.2~0.5cm。色調: 外面は浅黄橙色(10YR8/4)、内面は浅黄橙色(10YR8/3)。胎土: 密。1mm以下の雲母・白・赤・黒色砂粒を含む。焼成: 良好。残存度: 1/1。外内面はナデ・ユビオサエ調整を施している。(第7図-22、写真図版11-1-22)

23製塙土器 最大幅: 3.4cm(残存)。器高: 2.6cm(残存)。厚さ: 0.2~0.4cm。色調: 外・内・断面は浅黄橙色(7.5YR8/4)。胎土: 粗。1mm以下の赤・黒・白色砂粒を含む。焼成: 不良。残存度: 小片。古墳時代の混入品とみられる。(第7図-23、写真図版11-1-23)

24須恵器練鉢 口径: 30.8cm(復元)。器高: 6.9cm(残存)。厚さ: 0.4~0.7cm。色調: 外・内面は灰色(N6/7)、口縁外面は青灰色(5PB5/1)。断面は灰白色(N7/7)。胎土: やや密。2mm以下の白・黒・灰色砂粒を含む。焼成: 良好。残存度: 1/8。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末~13世紀初頭。(第7図-24、写真図版11-1-24)

溝3

土師器

46皿 口径: 8.2cm。器高: 1.3cm。厚さ: 0.3~0.4cm。色調: 外・内・断面は浅黄色(2.5Y8/3)。胎土: 密。1mm以下の砂粒を含む。焼成: 良好。残存度: 1/2。以下の46~63の土師器皿はすべてJタイプの13世紀代のものと思われる。(第10図-46、写真図版15-2-46)

47皿 口径: 8.5cm。器高: 1.3cm。厚さ: 0.4~0.5cm。色調: 外・内面は灰白色(5Y8/1)。胎土: 密。1mm以下の砂粒を含む。焼成: 良好。残存度: 完形。(第10図-47、写真図版15-2-47)

48皿 口径: 9.2cm(復元)。器高: 1.1cm。厚さ: 0.3cm。色調: 外・内・断面は浅黄橙色(10YR8/2)。胎土: 密。1mm以下の砂粒を含む。焼成: やや不良。残存度: 1/2。(第10図-48、写真図版15-2-48)

49皿 口径: 8.6cm。器高: 1.3cm。厚さ: 0.2~0.5cm。色調: 外・内・断面は灰白色(5Y8/1)。胎

土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：3/4。（第10図-49、写真図版15-2-49）

50皿 口径：8.4cm。器高：1.4cm。厚さ：0.3~0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR8/4）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：3/4。（第10図-50、写真図版15-2-50）

51皿 口径：9.2cm（復元）。器高：1.2cm。厚さ：0.3~0.4cm。色調：外面は灰白色（5Y7/2）、内・断面は灰白色（5Y8/2）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図-51、写真図版15-2-51）

52皿 口径：9.4cm（復元）。器高：1.4cm。厚さ：0.2~0.4cm。色調：外・内・断面は灰黄色（2.5Y7/2）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図-52、写真図版15-2-52）

53皿 口径：8.6cm。器高：1.3cm。厚さ：0.3~0.5cm。色調：外・内面は灰白色（5Y8/1）、断面は灰黄色（2.5Y6/2）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：不良。残存度：3/4。（第10図-53、写真図版15-2-53）

54皿 口径：9.1cm。器高：1.4cm。厚さ：0.2~0.5cm。色調：外面はにぶい黄橙色（10YR7/2）、内・断面は灰白色（10YR8/2）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図-54、写真図版15-2-54）

55皿 口径：8.6cm。器高：1.7cm。厚さ：0.3~0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（7.5YR8/4）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：7/8。（第10図-55、写真図版15-2-55）

56皿 口径：13.2cm（復元）。器高：1.9cm。厚さ：0.2~0.5cm。色調：外面はにぶい橙色（5YR7/4）、内面は淡橙色（5YR8/4）、断面は灰白色（5YR7/4）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図-56、写真図版15-2-56）

57皿 口径：12.7cm（復元）。器高：2.3cm。厚さ：0.5~0.6cm。色調：外・断面は浅黄橙色（10YR8/3）、内面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図-57、写真図版15-2-57）

58皿 口径：13.3cm。器高：2.7cm。厚さ：0.5~0.7cm。色調：外・内面は浅黄橙色（10YR8/1）、断面は灰白色（7.5Y7/1）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。残存度：1/2。（第10図-58、写真図版15-2-58）

59皿 口径：13.8cm（復元）。器高：2.6cm。厚さ：0.4~0.6cm。色調：外面はにぶい橙色（5YR7/3）、内・断面はにぶい橙色（7.5YR7/3）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図-59、写真図版15-2-59）

60皿 口径：13.0cm。器高：2.4cm。厚さ：0.2~0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：5/6。（第10図-60、写真図版15-2-60）

61皿 口径：14.2cm（復元）。器高：2.8cm。厚さ：0.3~0.4cm。色調：外面は浅黄橙色（10YR8/4）、内・断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。（第10図-61、写真図版15-2-61）

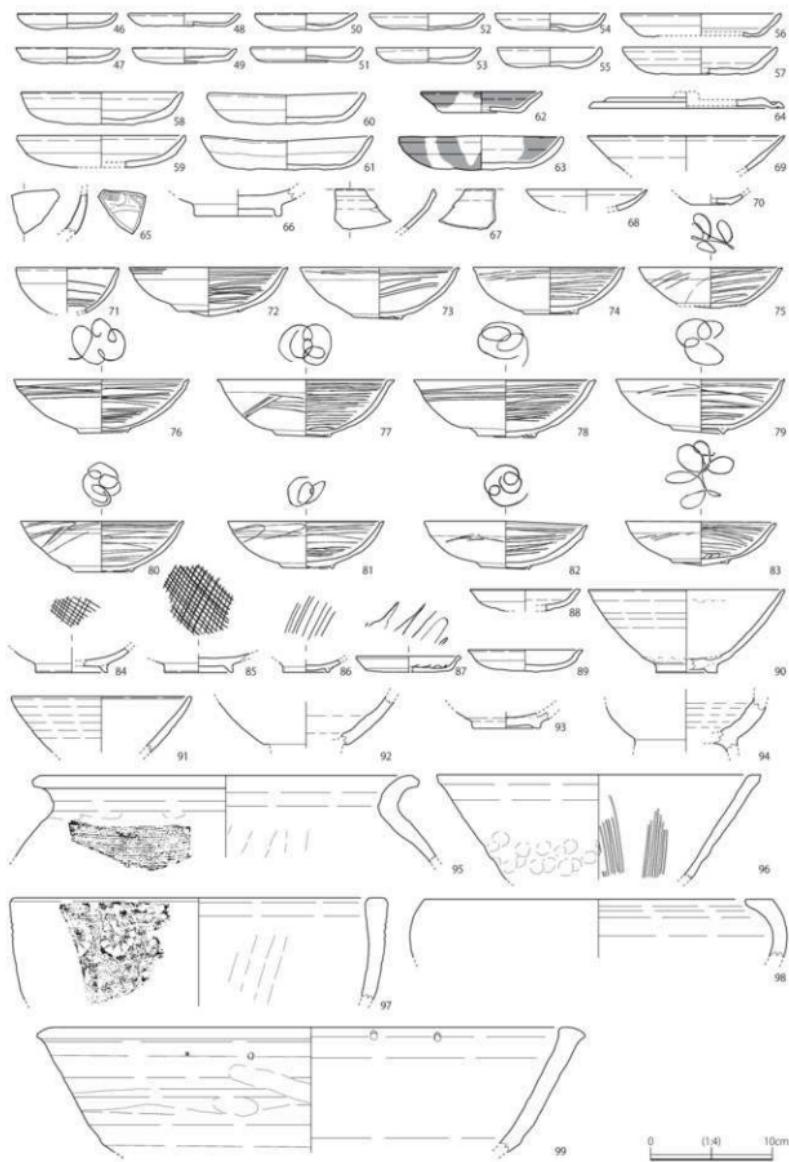
62皿 口径：10.0cm（復元）。器高：1.8cm。厚さ：0.4~0.5cm。色調：外・内・断面は黄橙色（10YR6/2）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。煤付着。（第10図-62、写真図版15-2-62）

63皿 口径：13.4cm（復元）。器高：2.8cm。厚さ：0.4~0.5cm。色調：外・内面は灰黄褐色（10YR6/2）、断面は浅黄橙色（10YR8/3）。胎土：やや密。2mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。煤付着。以上、46~63の土師器皿はすべてJタイプの13世紀代のものと思われる。（第10図-63、写真図版15-2-63）

須恵器

64環蓋 口径：16.0cm（復元）。器高：0.9cm。厚さ：0.3~0.6cm。色調：外面は灰白色（N7/）内・断面は明青灰色（5PB7/1）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。8世紀後半のものと思われる。（第10図-64、写真図版16-1-64）

103練鉢 口径：28.8cm（復元）。器高：11.3cm。厚さ：0.5~1.0cm。色調：外・内面は灰色（N



第10図 出土遺物（溝3・NN2013-2）

6/)、口縁部外面は灰色(N 4/)、断面は灰色(N 5/)。胎土：やや粗。2mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。(第11図-103、写真図版16-2-103)

104練鉢 口径：28.6cm(復元)。器高：9.3cm。厚さ：0.4～0.9cm。色調：外・内面は青灰色(5PB5/1)、口縁部外面は青黒色(5PB1.7/1)、断面は灰色(N 6/)。胎土：やや粗。4mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。(第11図-104、写真図版16-2-104)

105練鉢 口径：23.2cm(復元)。器高：8.1cm(残存)。厚さ：0.5～0.8cm。色調：外・断面は灰色(N 8/)、口縁部外面は灰色(N 3/)、内面は灰色(N 3/)。胎土：やや粗。6mm以下の白・灰・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。(第11図-105、写真図版16-2-105)

106片口練鉢 口径：30.6cm(復元)。器高：8.5cm(残存)。厚さ：0.6～0.8cm。色調：外面は灰色(N 6/)、口縁部外面は青灰色(5PB5/1)、内・断面は灰色(N 7/)。胎土：やや密。2mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。(第11図-106、写真図版16-2-106)

107片口練鉢 口径：26.4cm(復元)。器高：10.1cm。厚さ：0.5～1.1cm。色調：外・内・断面は灰色(N 5/)。胎土：やや密。5mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。外内面はナデ調整。東播系。12世紀末～13世紀初頭。(第11図-107、写真図版16-2-107)

108練鉢 口径：29.6cm(復元)。底径：14.0cm(復元)。器高：12.7cm。厚さ：0.6～1.2cm。色調：外・内・断面は灰白色(N 7/)。胎土：やや粗。7mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/5。外内面はナデ調整。口縁に自然釉付着。猿投や瀬戸など東海系のもの。12世紀末～13世紀。(第11図-108、写真図版16-2-108)

磁器

65青磁碗 幅：3.9cm(残存)。器高：3.7cm(残存)。厚さ：0.5～0.8cm。色調：外・内面はオリーブ黄色(7.5Y6/3)、断面は灰白色(N8/)。胎土：密。2mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。同安窯系。D期の12世紀代のものと思われる。(第10図-65、写真図版16-1-65)

66青磁碗 底径：7.2cm(復元)。器高：2.2cm(残存)。厚さ：0.9～1.2cm。色調：外・内面は緑灰色(7.5GY6/1)、断面は灰白色(N7/)。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。龍泉窯系。(第10図-66、写真図版16-1-66)

67白磁碗 幅：4.7cm(残存)。器高：3.3cm(残存)。厚さ：0.4cm。色調：外・内面は灰白色(10Y6/1)、断面は灰白色(N8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。C期の12世紀代のもの。(第10図-67、写真図版16-1-67)

68白磁皿 口径：6.6cm(復元)。器高：2.7cm(残存)。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内面は灰白色(7.5Y8/1)、断面は灰白色(7.5Y7/1)。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。C期の12世紀代のもの。(第10図-68、写真図版16-1-68)

69白磁碗 口径：16.2cm(復元)。器高：2.9cm(残存)。厚さ：0.2～0.3cm。色調：外・内面は明緑色(7.5GY8/1)、断面は灰白色(N8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。D・E期で12世紀～13世紀前半。(第10図-69、写真図版16-1-69)

70白磁皿 底径：3.2cm(復元)。器高：0.9cm(残存)。厚さ：0.4cm。色調：外・内面は灰白色(7.5Y8/1)、断面は灰白色(7.5Y7/1)。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。(第10図-70、写真図版16-1-70)

瓦器

71碗 口径：8.4cm(復元)。器高：3.8cm(残高)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色(N 8/)。胎土：やや粗。2mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。内面はヘラミガキがみられる。大和型IV-B段階で14世紀後半のものと思われる。(第10図-71、写真図版15-2-71)

72碗 口径：13.0cm。底径：5.1cm。器高：4.0cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面は灰色(N6/)、

断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：3/4。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施す。高台は不整形な三角形。大和型III-C段階で13世紀中ごろのものと思われる。（第10図-72、写真図版15-2-72）

73碗 口径：13.0cm。底径：4.1cm。器高：4.0cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内面は暗灰色（N3/）。断面は灰色（N6/）。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施す。高台は極めて低い三角形。大和型III-B段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図-73、写真図版15-2-73）

74碗 口径：12.4cm。底径：4.4cm。器高：3.6cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面は灰色（N7/）。断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施す。高台は低い三角形。大和型III-B段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図-74、写真図版15-2-74）

75碗 口径：11.8cm。器高：3.4cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内面は灰色（N4/）。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：完形。高台は剥離。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。大和型III-C段階で13世紀中ごろのものと思われる。（第10図-75、写真図版15-2-75）

76碗 口径：14.4cm。底径：4.0cm。器高：4.4cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内面は灰色（N4/）。断面は灰白色（N7/）。胎土：密。1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：9/10。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-B段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図-76、写真図版15-2-76）

77碗 口径：14.5cm。底径：4.3cm。器高：4.7cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内面は淡黄色（2.5Y8/3）、灰色（N4/）。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は密なヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-A（古）段階で12世紀後半と思われる。（第10図-77、写真図版15-2-77）

78碗 口径：15.1cm。底径：4.7cm。器高：4.7cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面は灰色（N4/）。断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：9/10。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-B段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図-78、写真図版15-2-78）

79碗 口径：13.9cm。底径：4.2cm。器高：4.5cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内面は灰色（N4/）。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-B段階で13世紀前半のものと思われる。（第10図-79、写真図版15-2-79）

80碗 口径：13.4cm。底径：4.8cm。器高：4.2cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内面は灰色（N6/）。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-A（古）段階で12世紀後半と思われる。（第10図-80、写真図版15-2-80）

81碗 口径：12.9cm。底径：4.1cm。器高：3.9cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内面は灰色（N5/）。胎土：密。1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施す。

方キを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-C段階で13世紀中ごろのものと思われる。(第10図-81、写真図版15-2-81)

82碗 口径：13.4cm。底径：4.1cm。器高：4.0cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内面は灰色(N6/)、断面は灰白色(7.5Y8/1)。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。1cmの大礫1点含む。焼成：やや不良。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は放射状のハケメを施し、粗いヘラミガキを施す。見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-B段階で13世紀前半のものと思われる。(第10図-82、写真図版15-2-82)

83碗 口径：12.4cm。底径：4.4cm。器高：3.6cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内面は灰色(N4/)。胎土：密。1mm以下の石英・砂粒をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：ほぼ完形。口縁外面はヨコナデ調整を施す。体部外面はユビオサエ調整で、口縁部付近のみ粗いヘラミガキを施す。体部内面は粗いヘラミガキを施し、見込部には連結輪状の暗文を施す。高台は低い三角形。大和型III-C段階で13世紀中ごろのものと思われる。(第10図-83、写真図版15-2-83)

84碗 底径：5.6cm(復元)。器高：2.1cm(残高)。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外面は灰色(N5/)、内面は暗灰色(N3/)、断面は灰色(N6/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。見込部には斜格子状の暗文を施す。大和型I-C段階で11世紀末のものと思われる。(第10図-84、写真図版15-2-84)

85碗 底径：6.0cm(復元)。器高：1.5cm(残高)。厚さ：0.5～0.7cm。色調：外・内面は灰色(N5/)、断面は灰白色(N7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。見込部には斜格子状の暗文を施す。大和型I-C段階で11世紀末のものと思われる。(第10図-85、写真図版15-2-85)

86碗 底径：3.8cm。器高：1.1cm(残高)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色(N7/)。胎土：密。1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：不良。残存度：小片。見込部にはジグザグ状の暗文を施す。大和型II段階で12世紀前半。(第10図-86、写真図版15-2-86)

87皿 口径：8.6cm(復元)。器高：1.3cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内面は灰色(N4/～N6/)、断面は灰白色(N8/)。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。見込部にはジグザグ状の暗文を施す。13世紀代のものと思われる。(第10図-87、写真図版15-2-87)

88皿 口径：9.0cm(復元)。器高：2.7cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外面は灰色(N4/)、内面は灰色(N5/)、断面は灰白色(10YR 8/1)。胎土：粗。2mm以下の黒・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。13世紀代のものと思われる。(第10図-88、写真図版15-2-88)

89皿 口径：9.4～9.8cm。器高：1.8cm。厚さ：0.3～0.6cm。色調：外・内面は暗青灰色(5PB4/1)。胎土：やや粗。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部外面はナデ調整を行い、体部外面はユビオサエ調整を行う。13世紀代と思われる。(第10図-89、写真図版15-2-89)

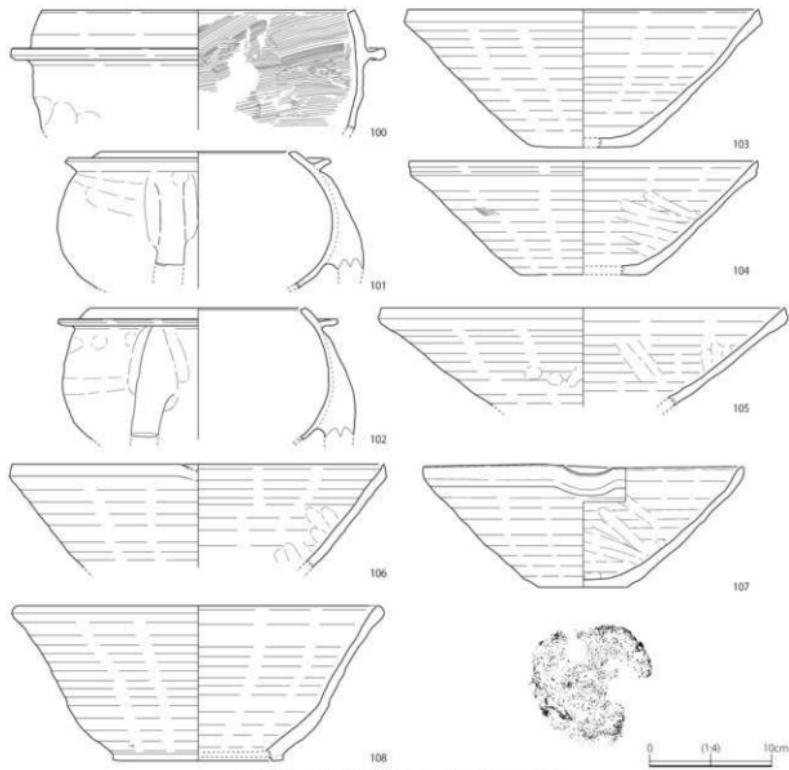
国産陶器

90碗 口径：16.2cm(復元)。底径：5.0cm(復元)。器高：6.8cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内面はオリーブ黄色(7.5Y6/3)、断面は灰白色(2.5YR8/1)。胎土：やや密。2mm以下の赤・黒色砂粒を含む。焼成：良好。内外面に灰釉。古瀬戸。14世紀後半～15世紀初頭のものと思われる。(第10図-90、写真図版16-1-90)

91碗 口径：14.8cm(復元)。器高：6.4cm(残存)。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外面はオリーブ黄色(7.5Y6/3)、内面は灰白色(10Y7/2)、断面は灰白色(7.5YR8/1)。胎土：やや密。3mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/8。内外面に灰釉。古瀬戸。14世紀後半～15世紀初頭のものと思われる。(第10図-91、写真図版16-1-91)

92壺 器高：6.8cm。厚さ：0.7～0.9cm。色調：外・内面は灰白色(N7/)、断面は緑灰色(10GY6/1)。胎土：やや密。2mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内面に灰釉。古瀬戸。(第10図-92、写真図版16-1-92)

93碗 底径：5.6cm(復元)。器高：1.4cm。厚さ：0.8cm。色調：外面は灰白色(10Y8/1)、内面は



第11図 出土遺物（溝3・N N 2013-2）

灰オリーブ色（7.5Y5/3）、断面は灰白色（7.5Y8/1）。胎土：やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。内面に灰釉。古瀬戸。14世紀後半～15世紀初頭のものと思われる。（第10図-93、写真図版16-1-93）

94壺 器高：4.5cm（残存）。厚さ：0.8～1.4cm。色調：外面はオリーブ黄色（7.5Y6/3）、内・断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面に灰釉。古瀬戸。（第10図-94、写真図版16-1-94）

瓦質土器

95甕 口径：31.6cm。（復元）。器高：6.7cm（残存）。厚さ：0.6～1.6cm。色調：外面は灰色（N5/）、内面は灰色（N4/）、断面は灰色（N8/）。胎土：やや粗。1mm以下の砂粒含む。焼成：やや不良。残存度：小片。河内・和泉型で14世紀代のものと思われる。（第10図-95、写真図版16-2-95）

96摺鉢 口径：26.6cm。（復元）。器高：8.6cm（残存）。厚さ：0.6～1.0cm。色調：外・内面は灰色（N4/）、断面は灰白色（2.5Y8/1）。胎土：やや密。2mm以下の砂粒含む。焼成：やや不良。残存度：小片。14世紀後半のものと思われる。（第10図-96、写真図版16-2-96）

97火鉢 口径：31.0cm（復元）。器高：8.9cm（残高）。厚さ：0.8～1.4cm。色調：外・内面は灰白色（N7/）、断面は灰白色（N8/）。胎土：やや粗。1mm以下の砂粒を含む。焼成：やや良好。残存度：

小片。体部にスタンプ花文を施す。火鉢C。15世紀代のものと思われる。(第10図-97、写真図版16-2-97)

98火鉢 口径:28.6cm(復元)。器高:4.8cm(残高)。厚さ:0.6~1.4cm。色調:外面は灰褐色(7.5YR5/2)、内面は灰色(N6/)、断面は浅黄橙色(7.5YR8/4)。胎土:やや粗。2mm以下の砂粒を含む。焼成:やや不良。残存度:小片。火鉢A。15世紀代のものと思われる。(第10図-98、写真図版16-2-98)

99火鉢 口径:45.0cm。(復元)。器高:10.3cm(残存)。厚さ:0.9~2.2cm。色調:外面は暗青灰色(5PB4/1)、内面は青灰色(5PB5/1)、断面は灰白色(N8/)。胎土:やや密。1mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。13~14世紀のもので有孔盤型火鉢と思われる。(第10図-99、写真図版16-2-99)

100羽釜 口径:25.6cm(復元)。器高:9.8cm(残高)。厚さ:0.8~0.9cm。色調:外・内・断面は灰白色(10YR8/2)。胎土:やや粗。4mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。河内産G型式で15世紀後半~16世紀初頭のものとみられる。(第11図-100、写真図版16-2-100)

101三足釜 口径:16.0cm(復元)。器高:11.2cm(残高)。厚さ:0.5~0.6cm。色調:外面は淡橙色(5YR8/3)、内面は灰白色(N8/)、断面は灰白色(10YR8/2)。胎土:粗。1mm以下の砂粒を含む。焼成:やや良好。残存度:1/3。13世紀代のものと思われる。(第11図-101、写真図版16-2-101)

102三足釜 口径:17.6cm(復元)。器高:10.8cm(残高)。厚さ:0.3~0.6cm。色調:外面は橙色(2.5YR7/6)、内面は灰白色(N8/)、断面は灰白色(10YR8/1)。胎土:粗。1mm以下の砂粒を含む。焼成:不良。残存度:1/3。13世紀代のものと思われる。(第11図-102、写真図版16-2-102)
瓦

109丸瓦 横幅:8.7cm(残存)。縦幅:5.0cm(残存)。厚さ:1.9~2.8cm。色調:外面は灰色(N5/)、内面は灰色(N4/)、断面は浅黄色(2.5Y7/3)。胎土:粗。5mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。裏面に布目が残る。玉縁。古代のものと思われる。(第12図-109、写真図版17-1-109)

110丸瓦 横幅:5.8cm(残存)。縦幅:8.9cm(残存)。厚さ:1.1~2.7cm。色調:外面は灰白色(N8/)・暗青灰色(5PB4/1)、内面は暗青灰色(5PB4/1)、断面は灰白色(N7/)。胎土:粗。3mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。表面に網目痕、裏面には布目が残る。玉縁。中世のものと思われる。(第12図-110、写真図版17-1-110)

111丸瓦 横幅:5.0cm(残存)。縦幅:6.0cm(残存)。厚さ:1.1~2.0cm。色調:外面は灰白色(N7/)、内面は青灰色(5PB5/1)、断面は灰白色(N7/)。胎土:粗。5mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。裏面は布目が残る。玉縁。中世のものと思われる。(第12図-111、写真図版17-1-111)

112平瓦 横幅:6.5cm(残存)。縦幅:5.7cm(残存)。厚さ:1.4~1.8cm。色調:外面は灰白色(7.5YR8/2)、内面は浅黄橙色(7.5YR8/3)、断面は青灰色(5Y8/1)。胎土:粗。5mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。表面に布目痕、裏面にはタタキ目が残る。古代のものと思われる。(第12図-112、写真図版17-1-112)

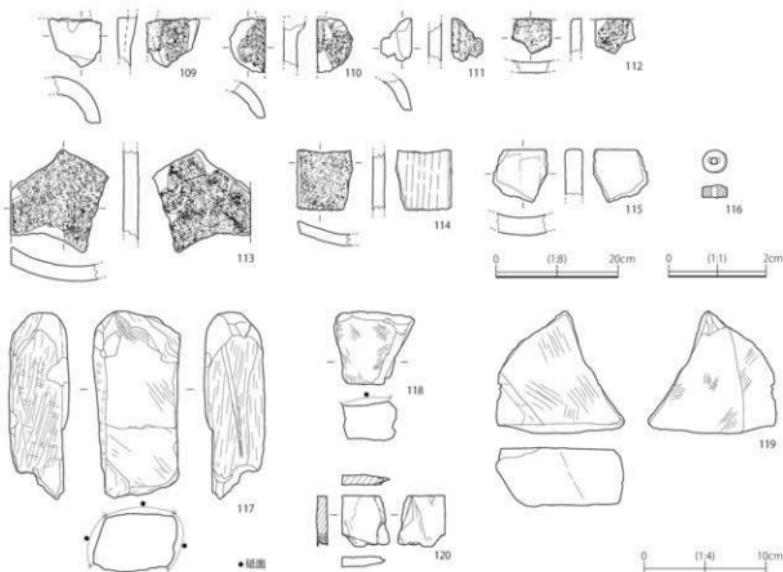
113平瓦 横幅:16.1cm(残存)。縦幅:16.9cm(残存)。厚さ:2.3~2.5cm。色調:外面は灰白色(N7/)、内面は灰白色(N8/)、断面は暗青灰色(5PB4/1)。胎土:粗。3mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。表面に布目痕があり、裏面は格子目タタキが施される。古代のものと思われる。(第12図-113、写真図版17-1-113)

114平瓦 横幅:9.1cm(残存)。縦幅:9.9cm(残存)。厚さ:1.9~2.0cm。色調:外面は青灰色(5PB6/1)、内面は暗青灰色(5PB3/1)、断面は明青灰色(5PB7/1)。胎土:粗。5mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。表面に布目痕が残る。中世のものと思われる。(第12図-114、写真図版17-1-114)

115平瓦 横幅:8.9cm(残存)。縦幅:8.7cm(残存)。厚さ:2.9cm。色調:外・内・断面は灰白色(5Y8/1)。胎土:粗。4mm以下の砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。古代のものと思われる。(第12図-115、写真図版17-1-115)

石製品

116白玉 横幅:0.5cm。縦幅:0.4cm。厚さ:0.25cm。滑石製。古墳時代のもの。(第12図-116、



第12図 出土遺物（溝3・NN 2013-2）

写真図版16-1-116)

117 砥石 横幅：7.2cm。縦幅：15.4cm。厚さ：4.8cm。砥面4面。（第12図-117、写真図版17-1-117）

118 砥石 横幅：6.7cm。縦幅：6.0cm。厚さ：3.2cm。砥面1面。（第12図-118、写真図版17-1-118）

119 砥石 横幅：10.5cm。縦幅：11.0cm。厚さ：4.9cm。砥面4面。表裏面を主砥面としている。（第12図-119、写真図版17-1-119）

120 不明石製品 横幅：3.9cm。縦幅：4.2cm。厚さ：0.9cm。表裏面ともに調整痕なし。側面2面に擦り切り痕。硯等の未成品か。（第12図-120、写真図版17-1-120）

（村上 始・實盛・古谷真人）

第4章 中野遺跡（NN1989-1、1993年度、NN2000-2） 立会調査の成果

第1節 1989-1立会調査

1. 調査の経過

平成元年度の立会調査については、四條畷市中野本町3～6、24番において公共下水道建設が計画された。計画箇所の西端は昭和61（1986）年度に実施した中野遺跡第10次調査（松岡1987）の南に隣接しており、遺跡の存在が予想されたため、関係各課で協議を行い、下水道工事時に立会調査を行うこととなった。本体工区については平成元（1989）年12月21日に四條畷市長から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の3第1項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の通知」が提出された。

同年10月2日から11月16日にかけて立坑掘削部の立会調査を行った。調査は必要に応じ遺構の略測、断面図作成、写真撮影、遺物の取上げを行うとともに、遺構埋土の水洗選別を実施した。立坑1、2、4で遺構を検出し多くの遺物が出土した。平成2（1990）年3月19日から6月7日にかけて本体工区（清滝部屋下水道1-202工区）の立会調査を行った。調査はNo.1からNo.20人孔までの下水管管理設工区全域で行い、工事に並行しNo.3人孔から開始しNo.7-No.5人孔間接続部で最終終了した。全ての箇所で写真撮影および断面略測を行い、必要に応じ土壤の水洗選別を行い、遺物を取上げた。

これらすべての調査における出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計30箱であった。

（實盛）

2. 検出遺構

この調査で遺構を検出できたのは、立坑掘削部においてであり、本体工区については調査の性格上断面観察と遺物の取上げに注力した。遺構の検出は立坑No.1において溝1基とPit2基、立坑No.2において大溝1基、立坑No.4において大溝とそれに流れ込む溝であった。

立坑No.1で検出した遺構群は、遺構面の標高が北端でT.P.+7.605m、南端でT.P.+7.520mであった。遺構の出土遺物はいずれも細片で図化できるものはなかったが、検出状況などから、昭和61年度第10次調査（松岡1987）の第3遺構面に対応するとみられる。同調査では古墳時代の建物群を検出しており、それが続いているものとみられる。同調査での遺構面標高がT.P.+8.3m程度であることから、同調査地が微高地にあたっており、本調査地は微高地縁辺部にあたるものとみられる。

立坑No.2はほぼ全域が大溝内とみられ、大溝1として遺物を取り上げた。大溝内は第1層灰色粘質土層、第2層青灰色粘質土層、第3層灰色粘質土層であり、いずれの土層からも多量の遺物が出土した。この大溝は出土遺物から古墳時代のものである。

立坑No.4で検出した大溝は、検出できた幅3.3m、長さ6.1m、深さ0.85mである。遺構面の標高は南東端でT.P.+12.345m、南西端でT.P.+12.220mであった。この大溝は南側の肩のみを検出したが、標高や検出状況からみると、2013-2次調査で検出した落込17と一連のものである可能性があり、その場合幅40mほどとみられる。本体部分の調査状況から、この大溝はほぼ北東から南西へと流れているとみられ、調査で出土した遺物の大半は他の地点のものも含めこの大溝に属する資料である可能性があろう。No.16-17人孔間接続部の断面図は立坑4に隣接した位置のもので、大溝部の堆積状況を示す。大溝内は灰色砂層が堆積しており、この土層から多くの遺物が出土した。出土遺物および2013-2次調査の状況から、大溝は古墳時代に機能したもので、中世段階にはほぼ埋没して耕作地として利用されるようになったとみられる。

（實盛）

3. 出土遺物

立坑No.1 (包含層)

121韓式系土器甕 横：12.2cm（残存）。縦：12.8cm（残存）。厚さ：0.4～0.7cm。色調：外・内面は黄橙色（7.5YR 8/8）、断面は灰色（N8/）。胎土：やや密。3mm以下の灰・白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。土師質。古墳時代のもの。（第14図-121、写真図版17-2-121）

122陶質土器甕 横：8.1cm（残存）。縦：8.9cm（残存）。厚さ：0.6～0.8cm。色調：外・内面は青灰色（5PB 5/1）、断面は暗紫灰色（5RP 4/1）。胎土：密。1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時代のもの。（第14図-122、写真図版17-2-122）

123須恵器环蓋 口径：12.2cm。器高：4.6cm。厚さ：0.2～0.6cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB 5/1）。胎土：密。2mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。M15型式（II型式1段階）で6世紀前半のものと思われる。（第14図-123、写真図版17-2-123）

124土製紡錘車 径：4.5cm。孔径：0.8～0.9cm。器高：1.8cm。色調：にぶい橙色（7.5YR 6/4）～灰白色（2.5Y8/2）。残存度：ほぼ完形。古墳時代のもの。（第14図-124、写真図版17-2-124）

これらに加え、滑石製白玉33点が出土した。（巻頭写真図版2-2）

立坑No.2 (大溝1)

弥生土器

125蓋 口径：12.2cm（復元）。器高：2.1cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内・断面はにぶい黄橙色（2.5Y6/3）。胎土：粗。2mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第14図-125、写真図版18-1-125）

土師器

126小型甕 口径：11.5cm。器高：11.6cm。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外面は浅黄橙色（7.5YR8/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）。胎土：粗。3mm以下の白・赤色砂粒含む。焼成：良好。残存度：完形。古墳時代後期後半のものと思われる。（第14図-126、写真図版18-1-126）

127甕 口径：20.8cm。（復元）。器高：6.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 7/3）、断面は灰色（5Y4/1）。胎土：やや密。3mm以下の雲母・赤・白色砂粒含む。焼成：不良。残存度：小片。口縁部外内面はヨコナデ調整。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。煤付着。7世紀中ごろのものと思われる。（第14図-127、写真図版18-1-127）

128ミニチュア土器把手付鉢 口径：11.2cm。（復元）。器高：7.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.6cm。色調：外内面はにぶい黄橙色（10YR6/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR 7/4）、断面は黒褐色（2.5Y3/1）。胎土：粗。1mm以下の白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第14図-128、写真図版18-1-128）

129ミニチュア土器 口径：6.4cm。（復元）。器高：3.3cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外内面はにぶい黄橙色（10YR6/3）、内面は浅黄橙色（7.5YR 7/4）、断面は黒褐色（2.5Y3/1）。胎土：粗。1mm以下の白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。（第14図-129、写真図版18-1-129）

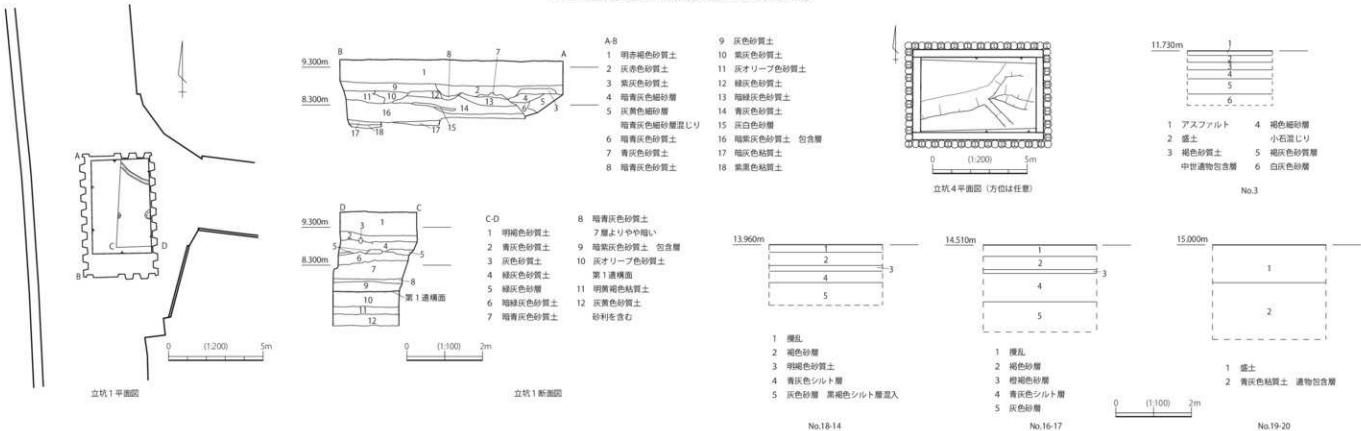
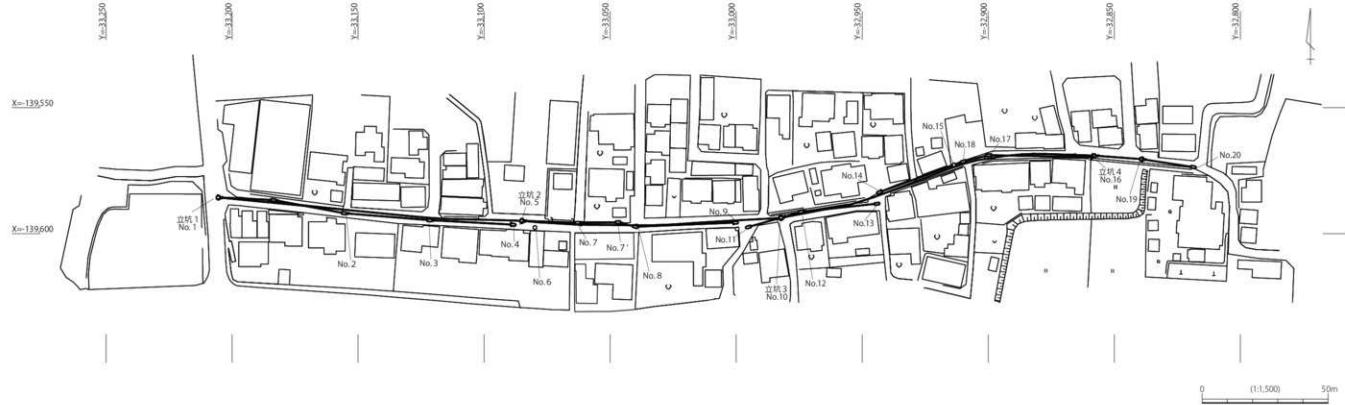
130ミニチュア土器 口径：6.4cm（復元）。器高：3.0cm。厚さ：0.4～0.6cm。色調：外・内面は灰白色（2.5Y8/2）、断面は灰色（5Y5/1）。胎土：やや密。1mm以下の雲母・白色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：1/6。外内面はナデ調整を施している（第14図-130、写真図版18-1-130）

131ミニチュア土器把手 横：2.7cm。（残存）。器高：1.9cm（残存）。厚さ：1.0～1.9cm。色調：外内断面はにぶい黄橙色（10YR7/4）。胎土：やや密。1mm以下の雲母・白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第14図-131、写真図版18-1-131）

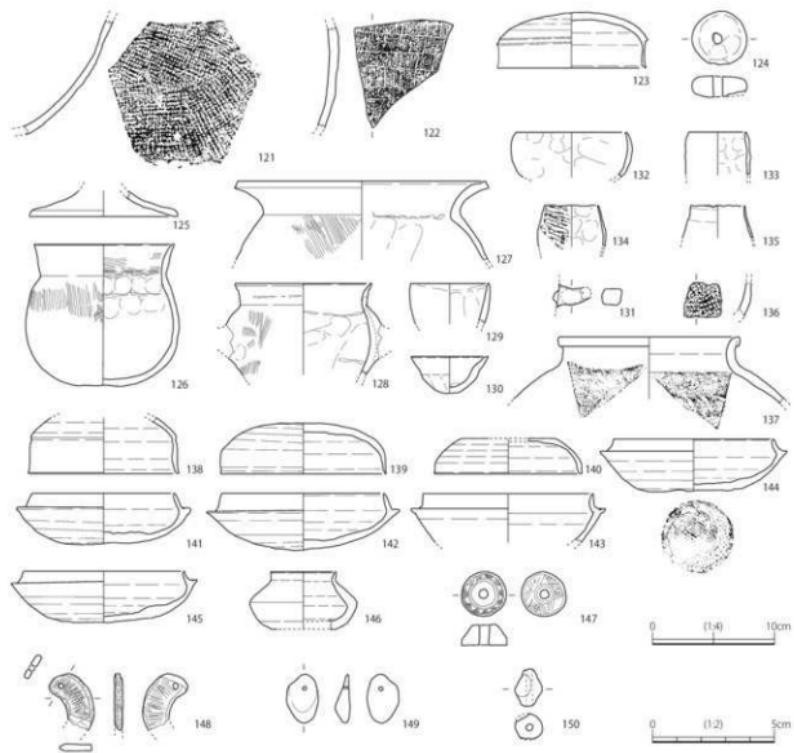
製塩土器

132製塩土器 口径：9.0cm（復元）。器高：3.7cm（残存）。厚さ：0.1～0.4cm。色調：外・断面は赤灰色（2.5YR6/1）、内面は橙色（2.5YR7/6）。胎土：粗。5mm以下の雲母・白・赤・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時代のもの。（第14図-132、写真図版18-2-132）

133製塩土器 口径：4.6cm（復元）。器高：3.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.3cm。色調：外・内・断面は灰色（5Y5/1）。胎土：粗。3mm以下の赤・白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。古墳時



第13図 調査地区平面図・断面図（N N 1989-1）



第14図 出土遺物 (N N1989-1 立坑1・立坑2)

代のいわゆるコップ形のもの。(第14図-133、写真図版18-2-133)

134製塙土器 口径: 4.4cm (復元)。器高: 3.4cm (残存)。厚さ: 0.1~0.2cm。色調: 外・内・断面は黄灰色 (2.5Y4/1)。胎土: 粗。2mm以下の白色砂粒を含む。焼成: 不良。残存度: 小片。古墳時代のいわゆるコップ形のもの。(第14図-134、写真図版18-2-134)

135製塙土器 口径: 4.4cm (復元)。器高: 2.7cm (残存)。厚さ: 0.1cm。色調: 外・内・断面は灰白色 (N8/)。胎土: 粗。1mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成: 不良。残存度: 小片。古墳時代のいわゆるコップ形のもの。(第14図-135、写真図版18-2-135)

韓式系土器

136平底甕 2.9×3.1cm。厚さ: 0.6cm。色調: 外面はにぶい黄橙色 (10YR6/4)、内・断面はにぶい橙色 (5YR6/4)。胎土: やや粗。2mm以下の雲母、白色・黒色鉱物含む。焼成: 良好。残存度: 小片。土師質。古墳時代の平底のものの底部に近い胴部。(第14図-136、写真図版18-2-136)

須恵器

137甕 口径: 15.0cm (復元)。器高: 5.1cm。厚さ: 0.5~0.8cm。色調: 外・内・断面は青灰色 (5PB6/1)。胎土: 密。1mm以下の白・黒色砂粒含む。焼成: 良好。残存度: 小片。(第14図-137、写真図版18-1-137)

138环蓋 口径：12.4cm（復元）。器高：4.6cm（残存）。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外面は灰色（N5/）、内・断面は灰白色（N8/）。胎土：密。3mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。MT15型式（II型式1段階）で6世紀前半のものと思われる。（第14図-138、写真図版18-1-138）

139环蓋 口径：13.4cm。器高：4.1cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：外・内面は青灰色（5PB6/1）。胎土：密。2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：完形。時計回りの調整。MT85型式（II型式3段階）で6世紀中ごろのものと思われる。（第14図-139、写真図版18-1-139）

140环蓋 口径：12.2cm（復元）。器高：2.9cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・断面は灰色（N6/）、内面は灰白色（N7/）。胎土：密。3mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。TK43型式（II型式4段階）で6世紀後半のものと思われる。（第14図-140、写真図版18-1-140）

141环身 口径：11.8cm。器高：4.2cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外面は青灰色（5B6/1）、内面は青灰色（5PB6/1）、断面は紫灰色（5P5/1）。胎土：やや密。4mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：完形。MT85型式（II型式3段階）で6世紀中ごろのものと思われる。（第14図-141、写真図版18-1-141）

142环身 口径：13.3cm。器高：4.7cm。厚さ：0.3～0.9cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB6/1）。胎土：やや密。5mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：3/4。MT85型式（II型式3段階）で6世紀中ごろのものと思われる。（第14図-142、写真図版18-1-142）

143环身 口径：14.0cm（復元）。器高：4.0cm（残存）。厚さ：0.3～0.5cm。色調：外・内・断面は青灰色（5PB6/1）。胎土：密。1mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。MT85型式（II型式3段階）で6世紀中ごろのものと思われる。（第14図-143、写真図版18-1-143）

144环身 口径：13.2cm。器高：4.3cm。厚さ：0.4～0.7cm。色調：外・内・断面は灰白色（5Y8/）。胎土：やや密。3mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：完形。MT85型式（II型式3段階）で6世紀中ごろのものと思われる。（第14図-144、写真図版18-1-144）

145环身 口径：13.2cm。器高：4.2cm。厚さ：0.3～1.0cm。色調：外面は灰白色（N7/）、内・断面は明青灰色（5PB7/1）。胎土：やや密。3mm以下の白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：5/8。MT85型式（II型式3段階）で6世紀中ごろのものと思われる。（第14図-145、写真図版18-1-145）

146壺 口径：5.4cm（復元）。器高：4.7cm。厚さ：0.2～0.9cm。色調：外・内・断面は灰白色（N7/）。胎土：密。2mm以下の白色砂粒含む。焼成：良好。残存度：1/4。飛鳥時代のもの。（第14図-146、写真図版18-1-146）

土製品

150土製切子玉 幅：1.1cm。器高：1.5cm（残存）。古墳期。（第14図-150、写真図版18-2-150）
石製品

147滑石製錘錐上 径：2.0cm。下径：3.7cm。孔径：0.7～0.8cm。器高：1.8cm。色調：暗緑灰色（10GY 4/1）。残存度：完形。古墳時代のもの。（第14図-147、写真図版18-2-147）

148滑石製勾玉 横幅：1.9cm。縦幅：2.3cm。古墳期。（第14図-148、写真図版18-2-148）

149垂飾 横幅：1.3cm。縦幅：2.0cm。緑灰色系の不定形の石材を用いる。古墳時代のものか。（第14図-149、写真図版18-2-149）

これらに加え、土玉7点、滑石製白玉218点、青色ガラス小玉1点、チャート製白玉1点が出土した。
(巻頭写真図版2-2)

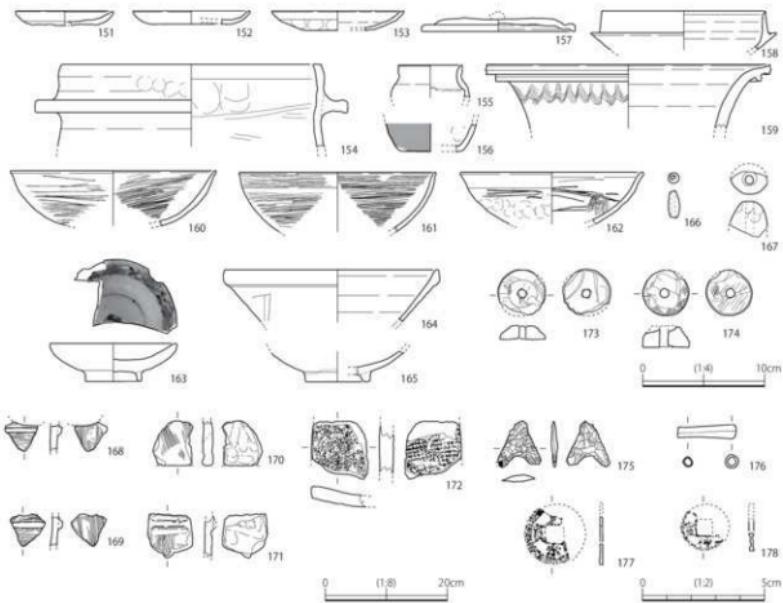
立坑No.4

土師器

151皿 口径：8.0cm（復元）。器高：1.2cm。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内・断面は灰白色（2.5YR 8/2）。胎土：密。1mm以下の黒・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。（第15図-151、写真図版19-1-151）

152皿 口径：9.6cm（復元）。器高：1.1cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内面は灰白色（10YR 8/1）、断面は黒色（7.5YR 2/1）。胎土：密。1mm以下の黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：1/6。（第15図-152、写真図版19-1-152）

153皿 口径：10.8cm（復元）。器高：1.6cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色（10YR



第15図 出土遺物 (N N 1989-1 立坑4)

8/3)、橙色 (2.5YR 7/6)。胎土：密。1mm以下の白・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はユビオサエ調整を施している。(第15図-153、写真図版19-1-153)

瓦質土器

154羽釜 口径：21.2cm (復元)。器高：6.7cm (残存)。厚さ：0.6cm。色調：外・内・断面は灰白色 (2.5Y8/2)。胎土：粗。1mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。15世紀代のものと思われる。(第15図-154、写真図版19-1-154)

ミニチュア土器

155ミニチュア土器 口径：5.2cm (復元)。器高：2.7cm (残存)。厚さ：0.3~0.5cm。色調：外・内・断面は浅黄橙色 (10YR8/3)。胎土：粗。3mm以下の雲母・白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外外面はナデ調整を施している。(第15図-155、写真図版19-1-155)

156ミニチュア土器 底径：4.8cm (復元)。器高：2.3cm (残存)。厚さ：0.4cm。色調：外・内・断面は灰白色 (2.5Y8/1)。胎土：粗。1mm以下の白・黒・赤色砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。(第15図-156、写真図版19-1-156)

須恵器

157环B蓋 口径：12.6cm (復元)。器高：1.1cm。厚さ：0.3~0.6cm。色調：外・内・断面は灰色 (N5/)。胎土：密。1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/6。平城宮V期で8世紀後半のものと思われる。(第15図-157、写真図版19-1-157)

158环身 口径：13.4cm (復元)。器高：3.2cm (残存)。厚さ：0.2~0.5cm。色調：外・内・断面は青灰色 (5PB5/1)。胎土：密。2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：やや良好。残存度：小片。MT15型式 (II型式1段階) で6世紀前半のものと思われる。(第15図-158、写真図版19-1-158)

159壺口縁 口径：23.2cm。（復元）。器高：5.3cm（残存）。厚さ：0.5～0.9cm。色調：外は青灰色（5PB5/1）、内・断面は青灰色（5PB6/1）。胎土：密。3mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。TK208型式（I型式3段階）。（第15図-159、写真図版19-1-159）

瓦器

160碗 口径：16.8cm（復元）。器高：4.5cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内面は暗灰色（N3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。大和型II-A段階で12世紀初頭のものと思われる。（第15図-160、写真図版19-1-160）

161碗 口径：16.2cm（復元）。器高：4.9cm（残存）。厚さ：0.4～0.5cm。色調：外・内面は暗灰色（N3/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外はナデ調整を行い、内面端部にはわずかに段差が残る。外はユビオサエ調整を行う。大和型II-A段階で12世紀初頭のものと思われる。（第15図-161、写真図版19-1-161）

162碗 口径：15.0cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.3～0.4cm。色調：外・内面は灰色（N4/）、断面は灰白色（N 8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。口縁部外はナデ調整を行い、外はユビオサエ調整を行う。大和型III-A段階で12世紀末のものと思われる。（第15図-162、写真図版19-1-162）

磁器

163染付小皿 口径：10.4cm（復元）。底径：4.6cm（復元）。器高：5.2cm。厚さ：0.9～1.0cm。色調：外・内面は明緑灰色（10GY8/2）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/3。見込にコンニャク印判による五弁花文がある。18世紀後半のものと思われる。（第15図-163、写真図版19-1-163）

164白磁 口径：17.4cm（復元）。器高：4.3cm（残存）。厚さ：0.3～0.7cm。色調：外・内面は灰白色（7.5Y7/2）、断面は灰白色（N8/）。胎土：密。1mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。C期の12世紀代のもの。（第15図-164、写真図版19-1-164）

165白磁 底径：5.2cm（復元）。器高：2.5cm（残存）。厚さ：0.3～0.6cm。色調：外・内面は灰白色（7.5Y8/2）、断面は灰白色（7.5Y8/2）。胎土：密。1mm以下の黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：1/4。C期の12世紀代のもの。（第15図-165、写真図版19-1-165）

土製品

166土鍤 幅：0.9cm。長さ：2.2cm。色調：灰白色（2.5Y8/1）。残存度：完形。古代のもの。（第15図-166、写真図版19-2-166）

167土鍤 幅：3.0cm（残存）。長さ：2.9cm（残存）。色調：外・内・断面は灰白色（10YR8/2）。胎土：粗。2mm以下の白色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。（第15図-167、写真図版19-2-167）

埴輪

168円筒埴輪 幅：5.4cm（残存）。器高：4.8cm（残存）。厚さ：1.0～1.4cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：やや粗。2mm以下の白・灰・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はヨコハケ調整、内面はタテハケ調整が施されている。突端に接するように透孔が配置される。（第15図-168、写真図版19-1-168）

169円筒埴輪 幅：5.7cm（残存）。器高：5.3cm（残存）。厚さ：0.9～1.0cm。色調：外・内面は浅黄橙色（7.5YR 8/4）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）。胎土：やや粗。2mm以下の白・灰・赤色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面はヨコハケ調整、内面はタテハケ調整が施されている。（第15図-169、写真図版19-1-169）

170円筒埴輪 幅：6.5cm（残存）。器高：7.3cm（残存）。厚さ：1.2cm。色調：外・内面はぶい橙色（10YR 7/3）、断面は灰白色（7.5Y7/1）。胎土：やや密。5mm以下の白・茶色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。底部片。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ・ユビオサエ調整が施されている。（第15図-170、写真図版19-1-170）

171円筒埴輪 幅：7.4cm（残存）。器高：7.1cm（残存）。厚さ：1.2cm。色調：外・内面はぶい橙色（10YR 7/3）、断面は灰白色（7.5YR7/1）。胎土：やや密。4mm以下の白色砂粒を含む。焼成：不良。残存度：小片。外面はタテハケ調整、内面はタテ方向のユビナデ調整が施されている。（第15図-171、

写真図版19-1-171)

瓦

172平瓦 横幅:9.3cm (残存)。縦幅:9.5cm。色調:外面は灰白色 (5Y7/1)、内・断面は灰白色 (N7/)。胎土:粗。3mm以下の白・黒・灰・赤色砂粒を含む。焼成:良好。古代のもの。(第15図-172、写真図版19-1-172)

石製品

173滑石製紡錘車 上径:2.3cm。下径:3.9cm。孔径:0.8cm。器高:1.1cm。色調:オリーブ灰色 (10Y 4/2)。残存度:完形。古墳時代のもの。(第15図-173、写真図版19-2-173)

174滑石製紡錘車 下径:3.7cm。孔径:0.7cm。器高:1.6cm。色調:緑灰色 (10GY 6/1)。残存度:上部破損。古墳時代のもの。(第15図-174、写真図版19-2-174)

175石獣 幅:1.7cm。器高:1.9cm。繩文時代の凹基式。(第15図-175、写真図版19-2-175)

金属製品

176煙管吸口 幅:0.4~0.6cm。長さ:2.4cm (残存)。厚さ:0.1cm。青銅製。江戸期のもの。(第15図-176、写真図版19-2-176)

177皇宋通宝 直径:2.5cm (復元)。厚さ:0.1cm。残存度:1/2。1039年初鑄の北宋銭。(第15図-177、写真図版19-2-177)

178□□神宝 直径:1.9cm (復元)。厚さ:0.2cm。残存度:1/2。直径と錢質から皇朝十二銭の饒益神宝 (859年初鑄) である可能性が極めて高い。(第15図-178、写真図版19-2-178)

これらに加え、土玉3点、土製算盤玉1点、滑石製有孔円盤2点、滑石製白玉176点、ガラス小玉9点 (青2・黒2・桃1・水4) が出土した。(巻頭写真図版2-2)

本体工区 (202工区)

埴輪

179円筒埴輪 (口縁部) 口縁部径:31.0cm (復元)。器高:7.5cm (残存)。厚さ:0.9~1.0cm。色調:外・内・断面は浅黄橙色 (7.5YR 8/6)。胎土:粗。6mm以下の白・灰色砂粒を含む。焼成:良好。残存度:小片。口縁外内面はヨコナデ調整、外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整が施されている。出土地点不明。(第16図-179、写真図版20-1-179)

弥生土器

180甕 底径:5.9cm。器高:5.1cm (残存)。厚さ:0.4~1.6cm。色調:外面は浅黄橙色 (10YR 8/4)、内面は灰白色 (5Y8/1)、断面は黒褐色 (2.5Y3/1)。胎土:やや粗。3mm以下の白色砂粒を含む。焼成:不良。残存度:小片。人孔19-20間出土。(第16図-180、写真図版20-1-180)

181壺 底径:4.8cm。器高:2.2cm (残存)。厚さ:0.3~0.9cm。色調:外・内・断面はにぶい黄橙色 (10YR 6/3)。胎土:やや密。4mm以下の白色砂粒を含む。焼成:やや不良。残存度:小片。第IV様式。人孔19-20間出土。(第16図-181、写真図版20-1-181)

石製品

184砥石 横幅:2.4cm。縦幅:3.0cm。厚さ:0.7cm。砥面4面。人孔19-20間出土。(第16図-184、写真図版20-1-184)

185不明石製品 横幅:0.5~0.7cm。縦幅:2.9cm。滑石製。円柱状で先端部が若干尖る。管玉などの未成品の可能性がある。人孔12-13間出土。(第16図-185、写真図版20-1-185)

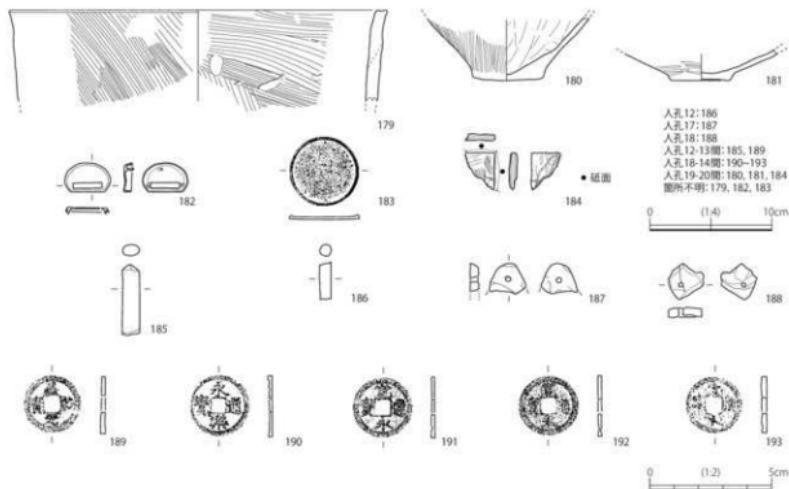
186菅玉未成品 横幅:0.5cm。縦幅:1.5cm。滑石製。穿孔前のもの。人孔No.12出土。(第16図-186、写真図版20-1-186)

187剣形石製品 横幅:1.5cm (残存)。縦幅:1.2cm (残存)。厚さ:0.4cm。滑石製。基部のみの破片。人孔No.17出土。(第16図-187、写真図版20-1-187)

188滑石製有孔円盤 横幅:1.4cm (残存)。縦幅:1.5cm (残存)。厚さ:0.4cm。滑石製。剣形石製品の一部である可能性がある。人孔No.18出土。(第16図-188、写真図版20-1-188)

金属製品

182青銅製鎧帶(丸鞘) 横幅:3.7cm。縦幅:2.4cm。器高:0.8cm (最大)。厚さ:0.1cm。出土地点不明。(第16図-182、写真図版20-1-182)



第16図 出土遺物 (N N1989-1 本体工区)

183銅鏡 直径: 5.7~5.8cm。厚さ: 0.2cm。残存度: 完形。江戸時代の懷中鏡とみられる。出土地点不明。(第16図-183、写真図版20-1-183)

189景祐元宝 直径: 2.4cm。厚さ: 0.1cm。残存度: 完形。人孔12-13間出土。1034年初鑄の北宋銭。(第16図-189、写真図版20-1-189)

190永業通宝 直径: 2.6cm。厚さ: 0.2cm。残存度: 完形。人孔18-14間出土。1411年初鑄の明銭。(第16図-190、写真図版20-1-190)

191寛永通宝 直径: 2.5cm。厚さ: 0.1cm。残存度: 完形。人孔18-14間出土。江戸時代。(第16図-191、写真図版20-1-191)

192寛永通宝 直径: 2.5cm。厚さ: 0.1cm。残存度: 完形。人孔18-14間出土。江戸時代。(第16図-192、写真図版20-1-192)

193寛永通宝 直径: 2.3cm。厚さ: 0.2cm。残存度: 完形。人孔18-14間出土。江戸時代。(第16図-193、写真図版20-1-193)

これらに加え、各地点から下記の資料が出土した。(巻頭写真図版2-2)

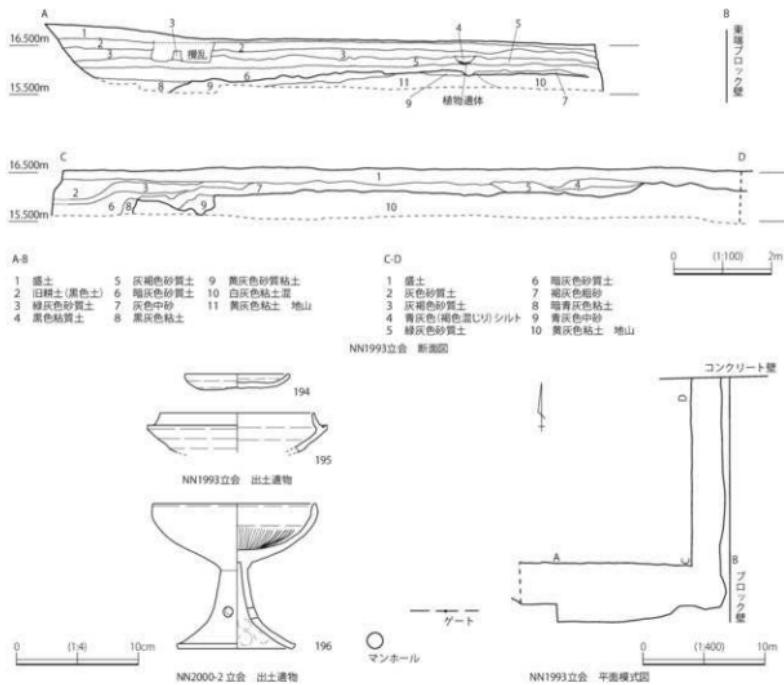
- ・人孔No.3: 滑石製白玉2点、ガラス小玉(黒)1点。
- ・人孔No.12: 滑石製白玉1点、ガラス小玉5点(黒3・桃1・不明1)。
- ・人孔No.14: 滑石製白玉3点。
- ・人孔No.17: 滑石製白玉6点、ガラス小玉(黒)1点。
- ・人孔No.18: 滑石製白玉11点、土玉1点、ガラス小玉(紺)1点。
- ・人孔2-3間: 滑石製白玉2点、土製円盤1点、ガラス小玉(色調不明)2点。
- ・人孔12-13間: 滑石製白玉3点、ガラス小玉6点(黒3・青1・不明2)。
- ・人孔16-17間: 滑石製白玉9点。
- ・人孔17-18間: 滑石製白玉8点、ガラス小玉4点(黒2・青1・不明1)。
- ・人孔18-14間: 滑石製白玉125点、同未成品1点、滑石製有孔円盤1点、滑石製勾玉1点、同未成品1点、滑石製管玉1点、滑石製角柱状製品1点、ガラス小玉61点(黒29・青5・赤2・桃5・水1・緑1・黄緑1・不明17)、石製丸玉1点、土玉1点、和釘2点。

- ・人孔19-20間：滑石製白玉6点。
- ・地点不明：ガラス小玉（水）2点。

このように、この調査では水洗選別により、古墳時代に属する多くの玉類が出土した。調査全体での古墳時代玉類等出土総計は、滑石製白玉603点、同未成品1点、滑石製勾玉2点、同未成品1点、滑石製管玉1点、同未成品1点、滑石製有孔円盤4点、滑石製紡錘車3点、剣形石製品1点、円柱状石製品1点、角柱状石製品1点、チャート製白玉1点、石製丸玉1点、石製垂飾1点、ガラス小玉93点、土玉11点、土製切子玉1点、土製算盤玉1点、土製有孔円盤1点、土製紡錘車1点で、合計730点であった。

なお、上記ガラス小玉の色調表記は一次整理時の選別に従ったが、「黒色」とされたものは、実際は濃紺色の可能性がある。

(村上・實盛・古谷)



第17図 調査地区平面模式図・断面図・出土遺物 (NN1993立会・NN2000-2)

第2節 1993年度立会調査

1. 調査の経過

平成5年度の立会調査については、四條畷市中野本町677-1において幼稚園園舎建て替えが計画され、平成5(1993)年5月24日に学校法人山本栄学園から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の2第1項(当時)の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。指導内容は発掘調査が必要との通知があった。

確認調査の結果、建物部分では埋蔵文化財への影響が及ぼさないため、隣接宅地との境の擁壁建設箇所の工事立会のみ行うこととした。同年8月31日に擁壁建設箇所の立会調査を行った結果、上師器皿(第17図-194)、須恵器环身(第17図-195)などが出土した。断面観察で遺構状の窓みを確認したため、断面図の作成を行った。

(實盛)

2. 出土遺物

194土師器皿 口径: 8.6cm。器高: 1.3cm。厚さ: 0.3~0.5cm。色調: 外・内面は灰白色(10YR8/2)、断面は黄灰色(2.5Y5/1)。胎土: 密。1mm以下の砂粒を含む。焼成: 不良。残存度: 3/5。(第17図-

194、写真図版20-2-194)

195須恵器环身 口径：12.6cm（復元）。器高：3.2cm（残存）。厚さ：0.2～0.5cm。色調：外・内・断面は明青灰色（5PB 7/1）。胎土：密。1mm以下の砂粒を含む。焼成：良好。残存度：小片。TK43型式（II型式4段階）である。（第17図-195、写真図版20-2-195）

（古谷）

第3節 2000-2立会調査

1. 調査の経過

平成12年度の立会調査については、四條畷市中野本町279-1において共同住宅建設が計画され、平成12（2000）年1月12日に谷口仁から四條畷市教育委員会を経由し文化庁長官へ文化財保護法第57条の2第1項（当時）の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。指導内容は発掘調査が必要との通知があった。

同年3月7日に確認調査を行うこととなったが、実際に現地で再度協議した結果建物部分は盛土がなされ埋蔵文化財への影響が及ばないことが判明したため、擁壁建設箇所の工事立会のみ行うこととした。同年7月18日に擁壁建設箇所の立会調査を行った結果、土師器高環（第17図-196）などが出士したが、明確な遺構の検出はなかった。

（實盛）

2. 出土遺物

196土師器高環 口径：13.3cm。底径：9.7cm。器高：11.9cm。厚さ：0.5～1.0cm。色調：外・内・断面は橙色（2.5YR 7/8）。胎土：やや粗。5mm以下の雲母・白・黒色砂粒を含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。外面ナデ調整。環部内面に暗文が施される。脚部内面はユビオサエ調整である。円形透孔。古墳時代中期のもので、須恵器編年のTK216型式期併行とみられる。（第17図-196、写真図版20-2-196）

（古谷）

第5章 調査のまとめ

第1節 調査のまとめ

今回報告した中野遺跡の調査では、遺跡北西部の状況を確認することができ、弥生時代から近世にわたる多くの成果があった。以下、遺構・遺物の時期ごとにまとめを行っていきたい。

古墳時代 2000-2次立会調査ではこの時期のほぼ完形の高杯が出土した。付近では未確認である古墳時代の遺構が周辺に存在している可能性があり、重要な資料といえるだろう。

また、1989-1次立会調査ではこの時期の遺構を確認した。立坑1では遺構群を確認し、北側の10次調査地（松岡1987）からの遺構の広がりを捉えることができた。立坑2もこの時期を中心とした大溝であった。立坑4で検出した北東から南西への大溝は南側の肩のみを検出したが、標高や検出状況からみると、2013-2次調査地で検出した落込17および土坑11と一連のものである可能性があり、その場合幅40mほどとみられる。各調査状況から、この大溝は古墳時代に機能したもので、中世段階に完全に埋没して耕作地として利用されるようになったとみられる。1989-1次立会調査で多量の玉類が出土しており、遺構の特殊性が観取される。また、周辺調査では調査地から東北東に300mの位置の奈良井遺跡で古墳時代に機能した東西方向の幅26mの大溝を検出しており（村上・實盛2013a）、そこから谷状の地形が2013-2次調査地まで続くため、これらはすべて一連のものである可能性がある。相当な幅かつ長大な溝の可能性があり、周辺に所在した馬廻い集落における、重要な意義を持つ区画溝の存在を考えたい。

飛鳥時代～平安時代 2013-2次調査で検出した井戸1は主にこの時期に機能したものであった。方形の外枠と円形の内枠の二重構造で、「常□」墨書き土器が出土しており、外枠土居枠材が年輪年代測定で708年 $\pm\alpha$ （辺型材）の測定値が出た。外枠の裏込め土からは7世紀後葉の、内枠の裏込め土から8世紀末～9世紀初頭の土器が出土しており、外枠は飛鳥時代末～奈良時代初頭ごろに構築され、何らかの理由で内枠が平安時代初頭に追加され、その後中世段階に廃絶したことが判明した。もともと方形板枠井戸として作られたものを、平安時代前期に円形枠井戸として修築を行い、最終的に中世段階に廃絶したとみられる。長期にわたり使用された井戸の存在は、この土地の特異性を示している可能性がある。

加えて、1989-1次立会調査では、青銅製鉄帶（丸鞘）や皇朝十二錢の鏡益神寶が出土した。周辺の調査では、1991年度1次の市役所東別館建設に伴う調査で、青銅製鉄帶（巡方）や皇朝十二錢の長年大寶が出土している（村上・實盛2019）。特に青銅製鉄帶などの出土からは、付近に官衙等重要施設の存在が想定される（次章参照）。いずれにしても、近接した位置で、帯に用いられる鉄帶の巡方と丸鞘がともに出土し、二種の皇朝十二錢がみつかっていることは、遺跡の重要性を際立たせる資料ということができるだろう。

鎌倉時代～室町時代 2013-2次調査で検出した遺構の多くはこの時期のものであった。特に溝3は調査面積に比して多量の遺物が出土しており、活発な人間活動の痕跡が覗える。同時期の井戸4を隣接して検出しており、周辺に同時期の集落が存在している可能性が高い。周囲で調査を行なう際に、十分検討しておくべき資料を得ることができたといえるだろう。

江戸時代 江戸時代には、遺跡一帯は農村景観と化し、2013-2次調査地西半には住宅が建設された。この段階の遺物が1989-1次立会調査でもいくつか出土しており、人間活動の状況をうかがい知ることができた。

このように、今回の調査では、遺跡北西部の状況を確認し、古墳時代から江戸時代まで長期にわたりて土地利用が行われ続けていることを確認することができた。今後も調査を継続することで、各時代の詳細な土地利用状況をさらに明らかにしていきたい。

（實盛）

第6章 讀良郡衙と持統天皇

—中野遺跡の官衙関連遺構から—

1. はじめに

四條畷市中野遺跡の調査では、これまでの調査で平安期を中心とした重要な成果があり、讀良郡の郡衙所在地の想定も可能な資料がみつかっている。「讀良郡」は現在の寝屋川市の一部、四條畷市西部、大東市の東部大半にあたる地域で、690年に即位した第41代天皇である持統天皇とかかわりが深く歴史上重要といえる。その郡衙の所在地を探すことから、持統天皇の生い立ちについても深く知ることができる可能性がある。

2. 讀良という土地

これまでの発掘調査による成果や文献の記述からみると、讀良地域（のちの讀良郡域：寝屋川市の一部、四條畷市西部、大東市東部大半）では古墳時代に、馬飼いが盛んに行なわれていた（野島1984）。

この馬飼いに従事していた豪族について、『日本書紀』には、天武天皇12（683）年10月5日の条に、「娑羅羅馬飼造・菟野馬飼造に連の姓を賜る」という記述がある。

これらの氏族の出自については、以下の記述がある。

- ・『日本書紀』 欽明天皇23(562)年7月1日条

秋七月己巳朔、新羅遣使獻調賦。其使人、知新羅滅任那、恥背國恩、不敢請罷。遂留、不歸本土。例同國家百姓、今河内国更荒郡鶴鶲野邑新羅人之先也。

（新羅の使者が帰国せず日本に住みつき、河内国更荒郡鶴鶲野邑の新羅人の先祖になった。）

- ・『新撰姓氏録』 河内国諸蕃の項

佐良々連 出自百濟国人久米都彦也

宇努造 出自百濟国人弥那子富意弥之後也

（これを須那子富意弥と読んで宇努と四條畷市砂を結び付ける説があるが、引用された翻刻に起因する誤りとみられる。）

- ・『新撰姓氏録』 河内国未定雜姓の項

宇努連 出自新羅皇子金庭興之後也

このように、娑羅羅（佐良々）氏・菟野（宇努）氏とともに、百濟や新羅からの渡来系の氏族であるとの記述がある。このことを裏付けるように、四條畷市域の古墳時代の遺跡からは、朝鮮半島とのかかわりを示す陶質土器や韓式系土器などが多く出土する。これら渡来系の人びとは、馬飼いの技術をもたらして四條畷付近に住みつき、豪族化したのであろう。

3. 讀良地域と持統天皇

次に、讀良地域と持統天皇との関係を考えたい。天皇は幼名を鶴野讀良皇女という。このうち「讀良」は、古代「讀良郡」の地名からとられている。また、「鶴野」は、先述のとおり『日本書紀』に更荒郡（讀良郡）の「鶴鶲野邑」が記録されている。この地名は「菟野馬飼造」と共通し、彼らはこの地域が本貫地の可能性がある。

古代讀良郡にあった郷名として、『和名類聚抄』高山寺本には、山家、甲可、牧岡、高宮、石井の五つが記されている。このうち山家は現大東市域、高宮は現寝屋川市域で、石井は不詳だが順序から寝屋川市域とされ（『和名抄』の郷名配列順が地理地勢順であることはこれまでに幾度も指摘されている（柴原2001））、残りの甲可、牧岡が現四條畷市域である。牧岡は他の写本や版本では枚岡と表記されるが、現東大阪市域の枚岡と混同されたとみられ、古写本である高山寺本の「牧岡」を正とすべきと考える。

從来、「鶴鶲野邑」は、菟野氏が馬飼い氏族であることなどから、馬飼いの牧があつたことによる

郷名とみられる「牧岡郷」(『和名類聚抄』高山寺本)と同一視されてきた。しかし、牧岡郷の別称としてはほかに「馬甘里」(『日本靈異記』中巻)がある。この「馬甘里」は、讃良郡内で行われた馬飼いに関連する名称とみられ、名称の付しが牧岡郷と共通する。牧岡郷は、「岡」が共通する丘陵地である四條畷市岡山を中心とした地域(四條畷市砂、岡山、寝屋川市小路)に比定できる(山口1972)。この地にはうちに郡名寺院讃良寺がおかれており、むしろ娑羅羅馬創造の本貫地であったと考えられる。鶴鵠野邑を牧岡郷に比定する根拠とされてきた「拠持統帝御名、鶴野与讃良、同一地」の文言は江戸期のものとされる上に出典が不明確なことに加え、その内容は「持統天皇の御名から鶴野と讃良は同一地とみなす」ことを述べているのみで、論拠とすること自体が困難である。このことから、「鶴鵠野邑」はこれ以外の高宮郷、石井郷、甲可郷、山家郷のいずれかにあった可能性が考えられる。

この鶴鵠野の地名は河内湖が低湿地であった際に水鳥が多く生息していた付近の景観によるものとみられる(瀬川1975)、丘陵景観による地名とみられる牧岡郷よりむしろ、湖畔の低湿地であった可能性のある甲可郷、山家郷を候補とすべきと考える。その中で、甲可郷内の白鳳寺院正法寺は後に山号「小野山」と号しており、母音の変換で鶴鵠野と通じるという指摘がある(瀬川1975)。これらのことから、「鶴野」はおおよそ現在の四條畷市南野・中野・清滝などの付近を中心とした甲可郷域を指すのではないかと考えられる。発掘調査の進展により牧岡郷域だけでなく甲可郷域(四條畷市中野・清滝・南野など)でも馬飼いが盛んであったことが明らかになってきており、「鶴鵠野邑」は甲可郷に比定でき、菟野氏は同郷域を基盤としていたと考える。

このように地名を皇族の名に使う場合、その地で生まれ育ったか、領地をもっていたか、その地出身の豪族から乳母が出来たためその豪族に養育されたといった理由が考えられるという(直木1960)。先述のとおり讃良地域では馬飼いを行なった渡来系の豪族である娑羅羅氏や菟野氏の存在が記録されており、これらの豪族の名も、持統天皇の名と共に共通している。天皇は、これらの豪族に養育された、あるいは乳母がこれらの豪族の出身だったといった理由で讃良地域にゆかりが深かったため、その地名を名に持つ可能性がある。持統天皇は、その幼名から、讃良地域とゆかりの深い天皇だったと言えるだろう。

4. 中野遺跡の官衙関連遺構・遺物

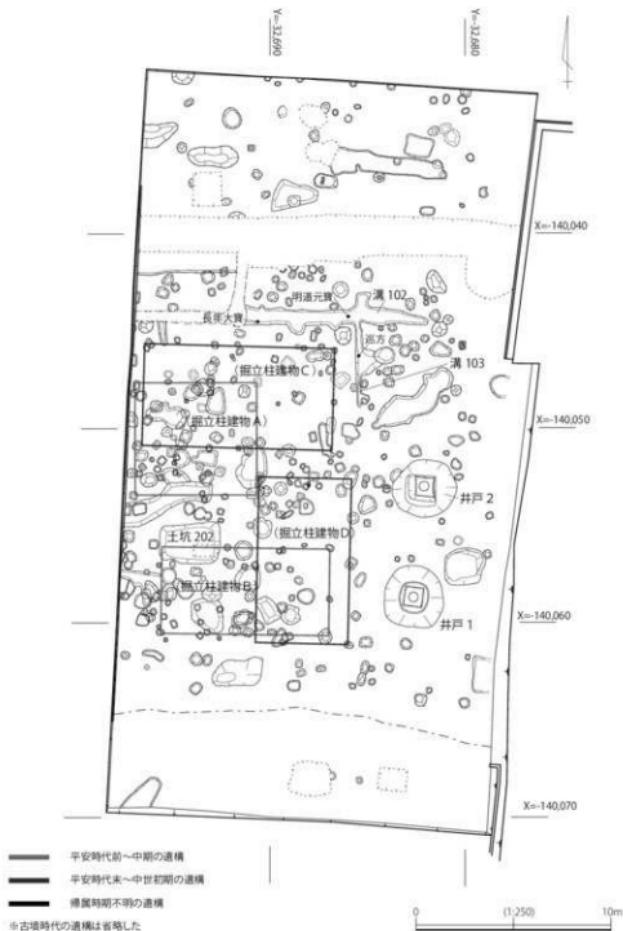
このように日本歴史上重要な地である讃良郡の郡衙跡について、所在地を探るうえで役立つ可能性があるのが、中野遺跡の調査成果である。

中野遺跡は、四條畷市中野本町から中野二丁目にかけて広がる遺跡で、弥生時代(約2500~1850年前)、古墳時代(約1850~1400年前)、平安時代(約1200~800年前)と中世(鎌倉時代~室町時代・約800~400年前)の集落跡である。官衙に関連する可能性がある遺構は平成3年(1991)11月から翌年1月にかけて、四條畷市役所の東別館建設に伴い行った発掘調査で検出した(村上・實盛2019)。

この調査で最も多くみつかった遺構は平安時代後期~鎌倉時代前期のものであった。官衙関連の遺構としては、青銅製鉢帶(巡方)が出土した溝103、皇朝十二錢の長年大寶や宋錢の明道元寶などが出土した溝102があげられ、これらは東西および南北方向のほぼ正方位をとる。

報告時には検討できなかったが、この調査では一次整理時に各遺構の帰属時期を細かく検討しており、その資料を用いながら再検討した結果、溝102の南、溝103の西の区画に4棟の掘立柱建物を検出していたことがわかった。いずれも正方位を取り、柱穴の帰属時期などから平安時代前~中期の掘立柱建物A・Bと、平安時代後~鎌倉時代前期の掘立柱建物C・Dの2段階にわけられる。溝102、103で出土した遺物は両時期にまたがっており、両溝は継続して存続していたとみられる。一方、溝102に区画された北側では遺構の検出数が南側より著しく少なくなっている。すなわち、これらの掘立柱建物はいずれも溝102、103によって区画された土地に建てられたと考えられる。建物の配置からは官衙などの中心施設そのものを検出したというよりは、付属施設である蓋然性が高いが、巡方や皇朝十二錢などの出土から考えると、至近に官衙などの中心施設が存在した可能性は十分にある。

他の特筆すべき遺構は井戸2で、應保二年の墨書がある曲物井戸枠や青白磁合子蓋などを含む多くの遺物が出土した。特に墨書曲物は、年代が分かる資料として貴重なものであり、平成25年度に四條



第18図 中野遺跡（NN 1991-1）の官衙関連遺構

曇市指定有形文化財に指定された。應保二年は1162年にあたり、平安時代末の年代の定点となる資料と言える。

周辺の調査でも、1989年度の公共下水道工事に伴う調査で、青銅製鉢帶(丸鞘)が出土している(今回報告)。また、同一調査で皇朝十二錢の饒益神寶も出土している。近接した位置で、帶に用いられる鉢帶の邊方と丸鞘がともに出土し、二種の皇朝十二錢がみつかっていることは、遺跡の重要性を際立たせる資料ということができるだろう。

加えて、2013-2次調査(今回報告)では、飛鳥時代末～奈良時代初頭に築造され、修築を経て中世まで継続して機能した井戸の存在が判明した。もともと方形板枠井戸として作られたものを、平安時代前期に円形枠井戸として修築を行い、最終的に中世段階に廃絶したとみられる。長期にわたり使用された井戸の存在は、この土地の特異性を示している可能性がある。

5. 讀良郡衙所在地を探る

このように、中野遺跡では正方位をとる二時期の掘立柱建物群や、その建物を区画する正方位の溝を検出し、鉢帶や皇朝十二錢、墨書遺物の出土があることから、官衙など重要施設の存在が想定できる。これまで讀良郡の郡衙所在地を市内の岡山南遺跡に求める説があったが(藤澤1977)、中野遺跡を讀良郡の郡衙所在候補地として挙げができる可能性があるだろう。

中野遺跡は、讀良郡のうち甲可郷域に属し、同じ一帯には古墳時代後期に墳長約70mと同時期の北・中河内隨一の規模で、この地域にあって馬飼いを主導した盟主墳といえる墓ノ堂古墳が築造されている。もともと盟主が存在した有力な地に郡衙が建設された蓋然性は考慮する価値があるといえるだろう。

持統天皇は、そのような馬飼い氏族の後裔とみられる倭羅羅氏や菟野氏とかかわりがあり、讀良地域にゆかりの深い天皇であった。『日本書紀』によれば、持統天皇八年(694)6月8日、更荒郡(讀良郡)から白いヤマドリが献上されている。その年の12月6日には藤原京へ遷都されており、このことは遷都に向けた吉兆として捉えられ、郡の官吏及び捕獲者には褒美として位や品物が与えられている。その舞台が天皇の出自と関わりがある地であることも、単なる偶然ではない可能性があるかもしれない。

今後も市内において調査を継続することで、讀良郡衙所在地の検討材料を充実させていきたい。

(實盛)

付記

この章は、令和2年2月23日に大阪府立近つ飛鳥博物館で開催予定であったが感染症拡大により中止となつた令和元年度冬季企画展『歴史発掘おおさか2019』調査成果報告会における発表予定原稿「中野遺跡の発掘調査—讀良郡衙を考える—」を基に改稿したものである。

主要参考文献

- 宇治谷孟1988『日本書紀 全現代語訳』下、講談社。
宇治谷孟1992『続日本紀 全現代語訳』上、講談社。
宋原永達男2001『河内国石川郡における鄭の配祀』『新堂寺廐』大阪府教育委員会。
四條畷市教育委員会編2006『こども歴史 わたしたけの四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市教育委員会編2010『歴史とみどりのまち ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
四條畷市史編さん委員会編2016『四條畷市史』第5巻古編、四條畷市。
實盛良彦2018『持統天皇と四條畷』『四條畷市文化財調査年報』第5号、四條畷市教育委員会。
瀬川芳則1975『清滝の古寺正法寺と氏寺の造営』『四條畷市文化財シリーズ3』、四條畷市教育委員会。
讃音能之監修2016『古代史再検証 持統天皇とは何か』別冊鳥島2490号、宝島社。
遠山美都男2010『天智と持統』講談社。
直木孝次郎1960『持統天皇』吉川弘文館。
瑞保己一編1894『新撰姓氏録』『群書類聚』第17輯、經濟雑誌社。
平毛呂昌1931『北河内部史稿史話』(1973年増補再刊)。
藤澤一夫1977『河内国讀良郡々跡跡即四條畷市岡山南遺跡』『大阪文化誌』第3巻第1号、財团法人大阪文化財センター。
村上 始2003『大阪・中野遺跡』『木簡研究』第25号、木簡学会。
村上 始・實盛良彦2019『四條畷市文化財調査年報』第6号、中野遺跡2、四條畷市教育委員会。

参考文献

- 青木 修2002「猿投窓の片口鉢について一片口鉢生産と編年に関する観察」『愛知県史研究』第6号。
- 後川恵太郎・盛良彦・井上智博編2015『讃良部条里遺跡』四條畠市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター。
- 阿部幸一1999「雁屋遺跡発掘調査概要」IV、大阪府教育委員会。
- 井上智博・多賀晴司編2003『讃良部条里遺跡』その2、財团法人大阪府文化財センター。
- 井上智博編2008『讃良部条里遺跡』VI、財团法人大阪府文化財センター。
- 岩瀬 透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編2010『龍屋北遺跡』I、大阪府教育委員会。
- 岩瀬 透編2012『龍屋北遺跡』II、大阪府教育委員会。
- 梅原末治1937「河内四條畠村志園古墳」『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
- 梅原末治1985「銅鏡の研究」木耳社。
- 大阪府教育委員会編1970『四条畠』正法寺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会。
- 片山長三1967a「枚方市地の先土器時代遺跡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 片山長三1967b「鶴文鏡代用鏡」『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 鍾方正樹2003b「井の考古学」同成社。
- 川西宏幸1978「円筒埴輪続論」『考古学雑誌』第64巻第2号、日本考古学会。
- 黒田 淳1989「飯盛山城跡の調査」『大東市埋蔵文化財発掘調査概報』1988年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳2013「飯盛山城跡測量調査報告書」大東市教育委員会。
- 古代の土器研究会編1992「都城の土器集成」古代の土器研究会。
- 古代の土器研究会編1993「都城の土器集成」II、古代の土器研究会。
- 近藤雅和・山本雅和・多賀晴司編2006『讃良部条里遺跡』IV、財团法人大阪府文化財センター。
- 佐伯博光・六辻彰香編2007『讃良部条里遺跡』V、財团法人大阪府文化財センター。
- 櫻井敬夫1972「考古学」『四條畠市史』第1巻、四條畠市役所。
- 櫻井敬夫1977「郷の歴史・郷の文化財」『四條畠市・四條畠市立歴史民俗資料館』。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・鳥島稔2006「こども歴史 わたしたちの四條畠」四條畠市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・鳥島稔2010「歴史とみどりのまち ふるさと四條畠」四條畠市教育委員会。
- 四條畠市教育委員会編2002『みどりの風と古墳』第17回特別展、四條畠市立歴史民俗資料館。
- 四條畠市教育委員会編2004『馬と生きる』開館20周年記念特別展、四條畠市立歴史民俗資料館。
- 四條畠市教育委員会編2008「ひとつぶの風」第23回特別展、四條畠市立歴史民俗資料館。
- 四條畠市史編さん委員会編2016『四條畠市史』第5巻考古編、四條畠市。
- 四條畠市立歴史民俗資料館編1990「はるかなる日々・四條畠の歴史・文化財」四條畠市・四條畠市教育委員会。
- 瀬川芳則1992「最古の木製下駄」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、同刊行会。
- 大東市教育委員会・四條畠市教育委員会2013『飯盛城跡縄張測量図』大東市教育委員会・四條畠市教育委員会。
- 田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店。
- 中世土器研究会編1995「概説 中世の土器・陶磁器」真隠社。
- 辻本 豊・森岡秀人編1989「弥生土器の様式と編年」近畿編I、木耳社。
- 寺沢 薫・森岡秀人編1989「弥生土器の様式と編年」近畿編II、木耳社。
- 中尾智平・山根 航編2009『讃良部条里遺跡』VII、財团法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩2001『和泉陶器窯址出土須恵器の式型編』芙蓉書房出版。
- 西尾 宏1987「中野遺跡発掘調査概要」IV、四條畠市教育委員会。
- 西尾 宏1988「中野遺跡発掘調査概要」V、四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1977「四條畠市中野遺跡」「まんだ」第2号、まんだ編集部。
- 野島 稔1978a「『野島跡』発掘調査概要」I、四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1978b「『南山上遺跡』『まんだ』第5号、まんだ編集部。
- 野島 稔1978c「大阪府四條畠市発見の製塙土器」『古代学研究』第86号、古代学研究会。
- 野島 稔1979a「『岡山遺跡出土の古代下駄』『まんだ』第8号、まんだ編集部。
- 野島 稔1979b「大阪府下における製塙土器出土遺跡」「ヒストリア」第82号、大阪歴史学会。
- 野島 稔1980a「清流古墳群発掘調査概要」四條畠市文化財研究調査会。
- 野島 稔1980b「四條畠市奈良井遺跡(2)」「まんだ」第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔1980c「四條畠市奈良井遺跡」「まんだ」第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔1981「更良岡山古墳群発掘調査概要」四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1982「岡山南遺跡発掘調査概要」II、四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1983「忍ヶ丘銀山遺跡発掘調査概要」II、四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1984a「雁屋遺跡発掘調査概要」I、四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1984b「河内の馬頭」「万葉集の考古学」筑摩書房。
- 野島 稔1985「四條畠市南野米崎遺跡」「まんだ」第24号、まんだ編集部。
- 野島 稔1986c「四條畠市埋蔵文化財発掘調査概要—1985年度—」四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1986b「中野遺跡発掘調査概要」III、四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1987a「雁屋遺跡」四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1987b「山山遺跡発掘調査概要」IV、四條畠市教育委員会。
- 野島 稔1987c「四條畠市南山下遺跡出土の馬形埴輪」「まんだ」第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1987d「四條畠市南山下遺跡」「まんだ」第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1987e「南野米崎遺跡」「韓式系土器研究」I、韓式系土器研究会。
- 野島 稔1988「四條畠市『南山下遺跡』」「まんだ」第35号、まんだ編集部。
- 野島 稔1990「四條畠市・中野遺跡」「まんだ」第39号、まんだ編集部。
- 野島 稔1991「南野米崎遺跡」「韓式系土器研究」III、韓式系土器研究会。

- 野島 稔1992「四條畷市・大上遺跡」「まんだ」第47号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993a「四條畷市志ヶ丘駿削遺跡」「まんだ」第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993b「四條畷市鍛田遺跡（一）」「まんだ」第50号、まんだ編集部。
- 野島 稔1994a「雁屋遺跡発掘調査概要－四條畷市江瀬美町所在－」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1994b「四條畷市鍛田遺跡（二）」「まんだ」第51号、まんだ編集部。
- 野島 稔1994c「四條畷市・四條畷小学校内遺跡」「まんだ」第53号、まんだ編集部。
- 野島 稔1995「南野遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1996「四條畷市坪井遺跡」「まんだ」第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996b「農耕工房のある風景」「まんだ」第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997a「五絃の琴」「まんだ」第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一）」「まんだ」第62号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997c「はにわはともだち」第12回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 野島 稔1999「四條畷市大上古墳群」「まんだ」第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔編2000『更良岡山遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔2006『四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔2008「王權を支えた馬」牧の考古学・高志書院。
- 野島 稔2009「河内湖東岸における古墳と古代豪族の面向」北河内の古墳財團法人交野市文化財事業団。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1976「岡山南遺跡発掘調査概要」1、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1977「正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・前田 桂1984「岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始1999「正法寺跡・大上遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2000「奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2001「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2002「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始・實盛良彦2002「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 原田昌則・尾崎良史2014「考古資料からみる八代の歴史」公益財團法人八尾市文化財調査研究会第三編・大阪府学務部。
- 平尾兵吾1928「北河内郡」大阪府史蹟名勝天然記念物・北河内郡教育会（1973年増補再刊）。
- 松岡良應1987「中野遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 宮崎泰史・藤永正明2006「年代のものさし」大阪府立近づ飛鳥博物館。
- 宮野淳一1992「良岡山遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会。
- 三好 玄・杉本厚典・野島 稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群」「大阪歴史博物館研究紀要」第6号、財團法人大阪市文化財協会。
- 村上 始1997a「木間町北遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始1997b「忍・丘駿削遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2000「四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001a「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001b「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001c「大阪府鍛田遺跡の調査速報」「月刊考古学ジャーナル」No.470、ニュー・サイエンス社。
- 村上 始2001d「四條畷市鍛田遺跡」「まんだ」第71号、まんだ編集部。
- 村上 始2001e「大阪府鍛田遺跡の調査速報」「祭祀考古」第21号、祭祀考古学会。
- 村上 始2001f「四條畷市雁屋遺跡」「まんだ」第73号、まんだ編集部。
- 村上 始2003a「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2003b「大阪・中野遺跡」「木簡研究」第25号、木簡学会。
- 村上 始2004「四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2006「一般国道163号の施工事例に伴う発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2011「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集』近畿弥生の会。
- 村上 始・實盛良彦2013a「中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2013b「北口遺跡・讚良郡条里遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2014「四條畷市文化財調査年報」第1号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2016「四條畷市文化財調査年報」第3号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2018「四條畷市文化財調査年報」第5号、中野遺跡、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2019「四條畷市文化財調査年報」第6号、中野遺跡2、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦・古谷真人2021「四條畷市文化財調査年報」第8号、中野遺跡3（墓ノ堂古墳）、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編2013「阪急山城跡測量調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編2017「四條畷市文化財調査年報」第4号、大上遺跡（大上古墳群）、四條畷市教育委員会。
- 山口 博1968「四條畷市の歴史」。
- 山口 博編1972「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博1990「四條畷市史」第4巻、四條畷市役所。
- 李 聖子編2020「飯盛城跡総合調査報告書」大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。

写 真 図 版 1



1. 1 地区近景（北西から・N N2013-2）



2. 1 地区南端壁面（北西から・N N2013-2）

写真図版 2



1. 1・2・4地区全景(北東から・NN2013-2)



2. 2地区井戸4完掘状況(東から・NN2013-2)

写 真 図 版 3



1. 3地区近景（西から・N N2013-2）



2. 3地区井戸1上層半截状況（北から・N N2013-2）

写 真 図 版 4



1. 3地区井戸1井戸枠検出状況（北から・N N2013-2）



2. 3地区井戸1下層半截状況（北から・N N2013-2）

写 真 図 版 5

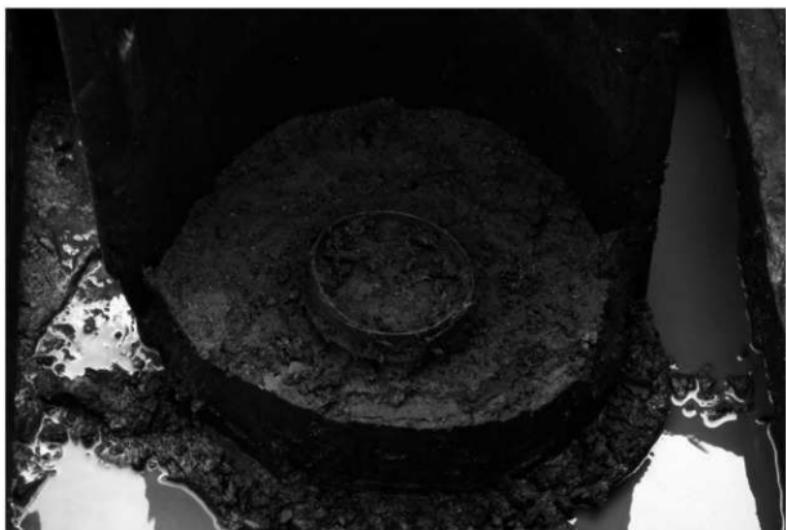


1. 3地区井戸 1方形板枠内半截状況（北から・N N2013-2）



2. 3地区井戸 1方形板枠除去状況（北から・N N2013-2）

写 真 図 版 6



1. 3地区井戸1井筒内曲物蓋出土状況（北から・NN2013-2）



2. 3地区井戸1井桁検出状況（北から・NN2013-2）

写 真 図 版 7



1. 3地区井戸1完掘状況（北から・NN2013-2）



2. 5・6地区近景（東から・NN2013-2）

写 真 図 版 8



1. 5地区溝3近景（西から・N N2013-2）

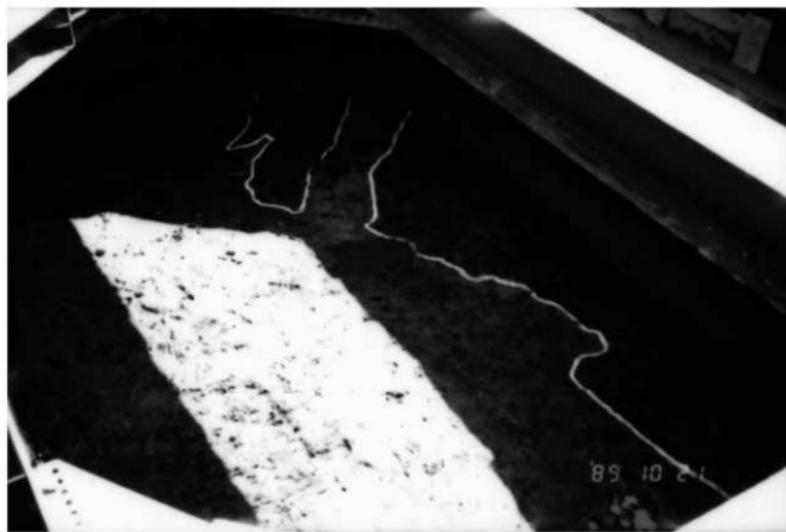


2. 5地区溝3遺物出土状況（南から・N N2013-2）

写真図版 9



1. 立坑4調査状況（西から・N N 1989-1）



2. 立坑4遺構検出状況（北西から・N N 1989-1）

写 真 図 版 10



1. 立坑 1 遺構完掘状況（西から・N N 1989-1）



2. 調査地全景（南西から・N N 2000-2）

写 真 図 版 11



1. N N 2013-2 出土遺物（包含層・土坑・井戸 4）



2. N N 2013-2 出土遺物（井戸 1 土器）

写 真 図 版 12



1. NN2013-2 出土遺物（井戸 1 瓦）



2. NN2013-2 出土遺物（井戸 1 井筒）

写 真 図 版 13



1. NN2013-2 出土遺物（井戸1井桁）



2. NN2013-2 出土遺物（井戸1隅柱）

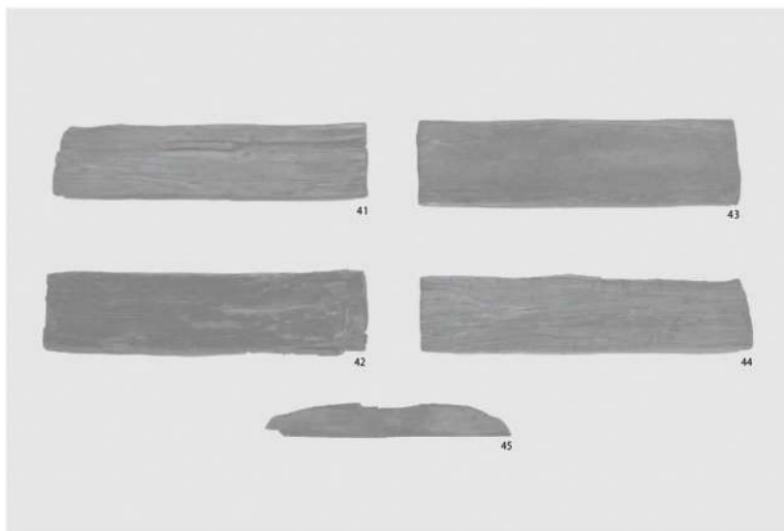
写 真 図 版 14



197

1. NN2013-2 出土遺物（井戸1曲物蓋）

写 真 図 版 15

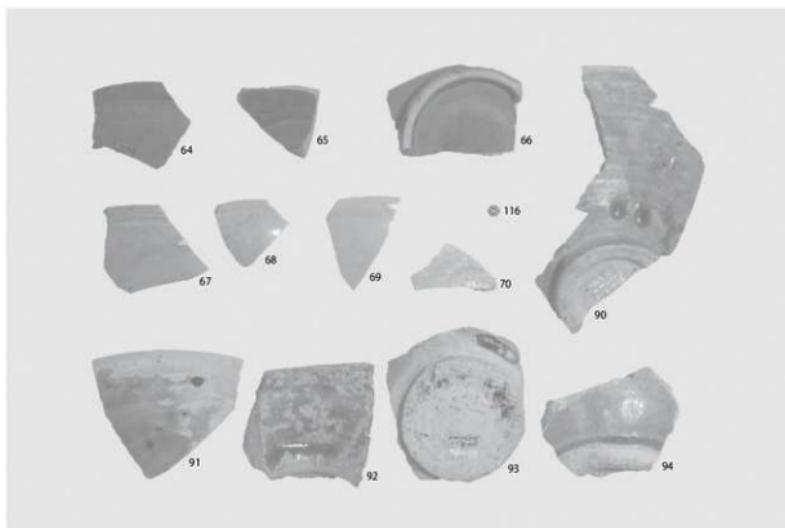


1. NN2013-2 出土遺物（井戸 1 横板）



2. NN2013-2 出土遺物（溝 3 土師器・瓦器）

写 真 図 版 16

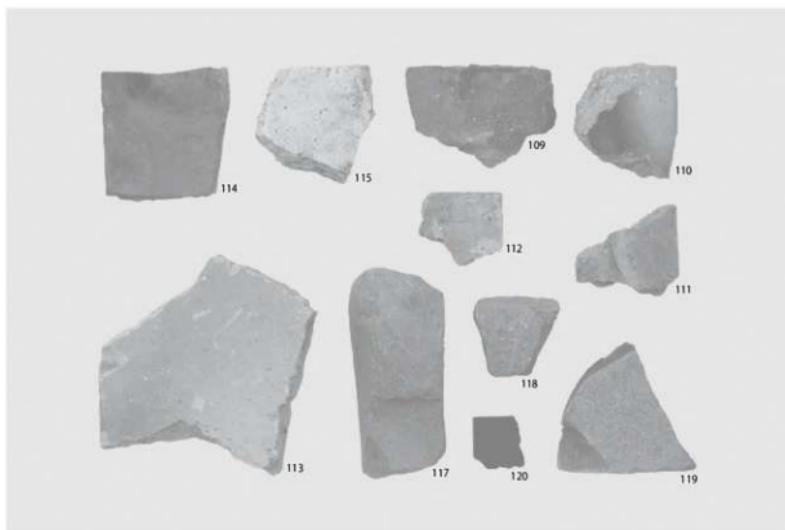


1. N N2013-2 出土遺物（溝3須恵器・陶磁器・玉）



2. N N2013-2 出土遺物（溝3須恵器・瓦質土器）

写 真 図 版 17



1. NN2013-2 出土遺物（溝3瓦・砥石）

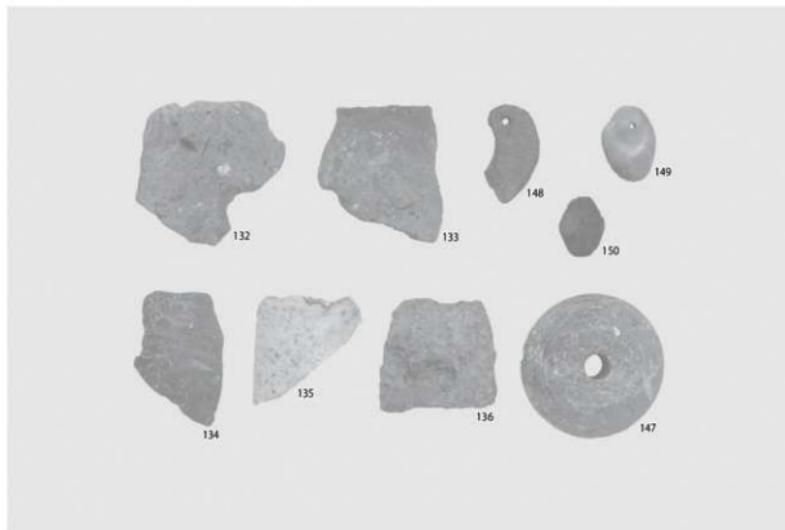


2. NN1989-1 出土遺物（立坑1）

写 真 図 版 18

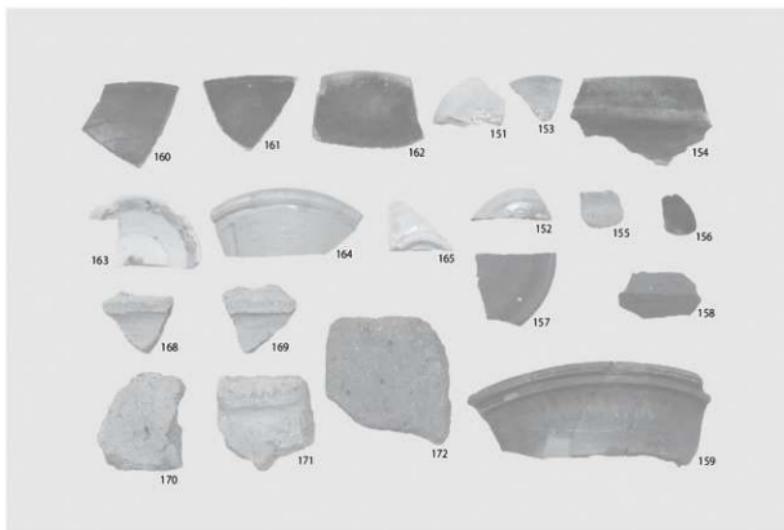


1. NN1989-1 出土遺物（立坑2）

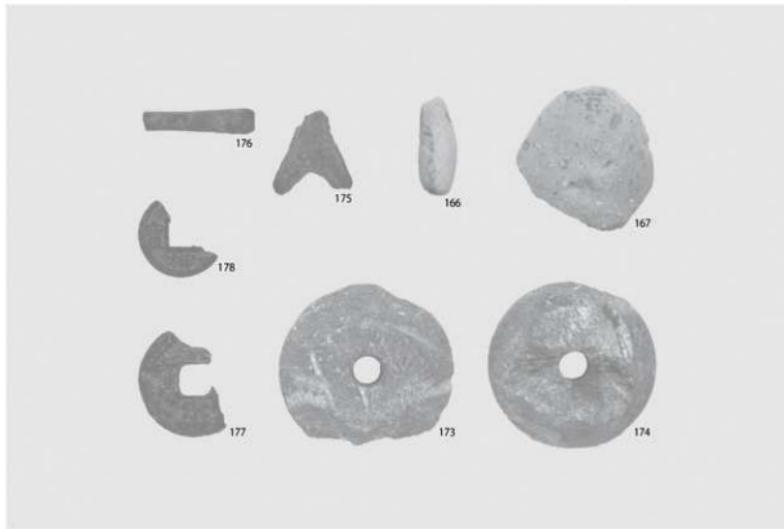


2. NN1989-1 出土遺物（立坑2）

写 真 図 版 19

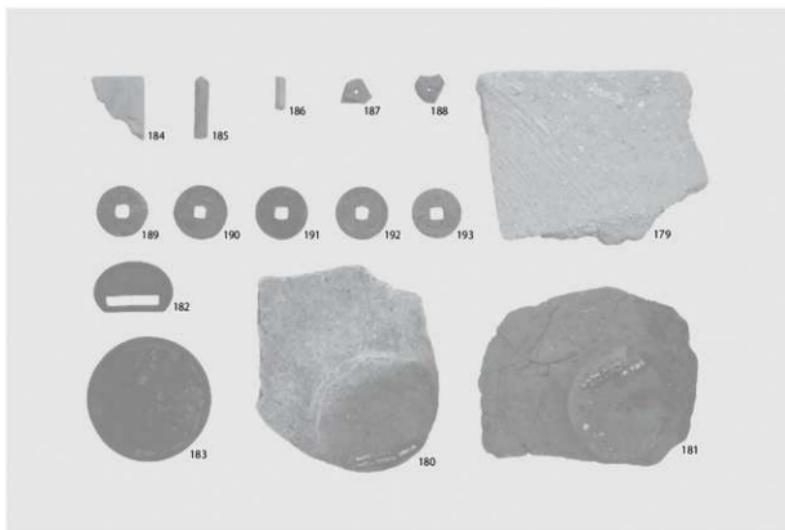


1. N N 1989-1 出土遺物（立坑4土器・瓦・埴輪）



2. N N 1989-1 出土遺物（立坑4石器・金属器）

写 真 図 版 20



1. NN1989-1 出土遺物（本体工区）



2. N N2000-2・93立会 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	しじょうなわてしぶんかざいちょうさねんぼう
書名	四條畷市文化財調査年報
巻次	第9号
副書名	中野遺跡 4
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第61集
編著者名	村上始・寅盛良彦・古谷真人
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2022(令和4)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
なかのいせき 中野遺跡 (NN2013-2)	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44' 30"	135° 38' 29"	平成26年2 月6日～3 月15日	658m ²	宅地造成
なかのいせき 中野遺跡 (NN2000-2)	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44' 30"	135° 38' 17"	平成12年7 月18日	—	擁壁設置 (立会)
なかのいせき 中野遺跡 (1993年立会)	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44' 23"	135° 38' 30"	平成5年8 月31日	—	擁壁設置 (立会)
なかのいせき 中野遺跡 (NN1989-1)	しじょうなわてし なかのほんまち 四條畷市 中野本町	272299	34° 44' 28"	135° 38' 22"	平成元年10 月2日～11 月16日、平 成2年3月 19日～6月 7日	—	公共下水道 設置 (立会)

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野遺跡 (NN2013-2)	集落跡	古墳、奈良、 平安、中世	井戸、溝、 土坑、Pit	土師器、須恵器、陶 磁器、黒色土器、瓦 器、土製品、金属製 品、石製品、木製品	平安時代の井戸から墨書 土器が出土。 井戸枠の年輪年代が708 年+αと判明。
中野遺跡 (NN2000-2)	集落跡	古墳	なし	土師器	
中野遺跡 (1993年立会)	集落跡	古墳、中世	なし	土師器、須恵器	
中野遺跡 (NN1989-1)	集落跡	弥生、古墳、 平安、中世、 近世	大溝、溝、 Pit	土師器、須恵器、陶 磁器、瓦器、土製品、 金属製品、石製品、 ガラス製品	皇朝十二錢、青銅製鎗帶 (丸柄)など官衙関連資 料の出土。 古墳時代玉類多量出土。

四條畷市文化財調査報告 第61集

四條畷市文化財調査年報

第9号

中野遺跡 4

令和4年(2022)3月31日発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
大阪府四條畷市中野本町1番1号

印刷 株式会社 近畿印刷センター